The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『暎咭唎国訳語』の編纂者と編纂過程 : 中国最初の英語辞典の分析
Author(s)	田野村, 忠温
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2021, 61, p. 125-174
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81515
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『暎咭唎国訳語』の編纂者と編纂過程
――中国最初の英語辞典の分析――

田野村　忠温

1　はじめに

『暎咭唎国訳語』は18世紀中葉の清代中国で編纂された官撰対訳語彙集『華夷訳語』丁種本の1つであり（後述）、中国初の英語語彙集である。中日両国における初期の英語学習書、語彙集の中にあって表1に示すように先駆の位置を占める。

表1　中日両国における初期英語学習書

	中国	日本
18世紀	1750年頃『暎咭唎国訳語』(写本)	
19世紀	1823年　モリソン『英吉利文話之凡例』 1826年　*The English and Chinese Student's Assistant* 1830年頃～『紅毛番話』類の語彙集 1843年　トーム『華英通用雑話』※2 1849年　鄭仁山『華英通語』道光本※2 1855年　子卿『華英通語』咸豊5年本※2 1860年　子芳『華英通語』咸豊10年本※2	1810～1811年　吉雄権之助他『諳厄利亜言語和解』(写本)※1 1811年　本木正栄『諳厄利亜興学小筌』(写本)※1 1814年　本木正栄他『諳厄利亜語林大成』(写本)※1 1822年頃　馬場貞由『訳司必用諳厄利亜語集成』(写本) 1840年　渋川敬直『英文鑑』(写本) 1851年　西成量他『エケレス語辞書和解』(未完、写本) 1860年　福沢諭吉『増訂華英通語』※2

表中に「写本」と記しているのは、当該書が成書当時に出版されず、写本の形によってのみ伝えられたことを示す。また、「※1」「※2」は、当該の英語学習書、語彙集の依拠資料と編集の問題をそれぞれ拙論（2017）、拙論（2018a）で考察したことを示す。

表1に示した時期を過ぎると日本では英語学習の機運が高まって英語関係の出版が急増するが、英語学習の普及開始は中国が先であった。日本で出版された最初の英語学習書として知られる福沢諭吉編訳『増訂華英通語』は中国の『華英通語』咸豊5年本に日本語による注釈を加えたものであった（拙論（2018a））。

『唎咭唎国訳語』はその内容に誤りや不可解な混乱が多く、同時期の類を成す外国語語彙集に比べて質が劣る。しかし、そのことがかえって、誰がどのようにして編めばこのような語彙集になるのかという興味を見る者に抱かせる。この問題についてはこれまでに中国でいくつかの論が発表されてきたが、私見によればいずれも真相に遠い。ここでは、『唎咭唎国訳語』の編纂者と編纂過程に関する筆者の分析、見解を述べる。

2 『唎咭唎国訳語』の概要と特徴

『唎咭唎国訳語』は中国語と英語の対訳語彙集である。各語彙項目は中国語の見出し語、その英語訳、その注音――漢字による発音表記――という 3 つの要素から成る。その一例を図 1 に示す。

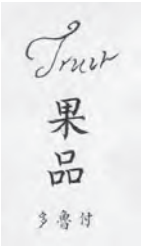

図 1 『唎咭唎国訳語』の「果品」の項目

この項目は、中央に書かれた見出し語「果品」の英語訳が fruit であり、その発音を「付魯多」という漢字連鎖で近似的に表せることを示している。注音は右から左に向かって書かれているが、字順を逆転して引用する。

中国語の見出し語を中央に据え、異言語の訳語と注音をその上下に配するこの書き方はおそらく中華思想の図像的表現であろう（拙論（2020））。この紛らわしい要素の配置のために、韓（2008）は英語が見出し語で、中国語が訳語だと考えている。また、Di（2005）、黄（2010）、聶（じょう）・王（2011）はいずれもこの基礎的な問題に関する判断が一貫せず、英語が見出し語だとする記述と中国語が見出し語だとする記述が混在している。しかし、中国語のほうが見出し語であることは、後に述べるように見出し語がチベット語の語彙集『西番訳語』のそれにほぼ完全に一致することから明らかである。英語にはない仏教用語や「朶甘（だかん）」「臨洮（りんとう）」といったチベットや中国の地名などの語彙項目が含まれているという事実もある。

『唎咭唎国訳語』の編纂者と編纂過程の問題の考察に入る前に、その前提としていくつかのことを述べる必要がある。

2.1 『華夷訳語』丁種本としての『暎咭唎国訳語』

『暎咭唎国訳語』は、冒頭で述べた通り、18 世紀中葉に編まれた通称『華夷訳語』丁種本の 1 つである。[1]『華夷訳語』は明清代の中国で編まれた漢民族の言語と異民族の言語の官撰対訳語彙集の総称であり、14 世紀の甲種本から 18 世紀の丁種本に至るまで編纂が繰り返された。[2] 古い『華夷訳語』には語彙集に加えて文例集を含むものもあるが、丁種本はいずれも語彙集だけである。

1931 年にドイツ人中国学者 W・フックス（Walter Fuchs、中国名福克司）が北京の故宮博物院で『華夷訳語』丁種本の写本を多数発見した（Fuchs（1931））。そこには、アジアの諸言語のほかに英語を含む欧州の 6 言語――ラテン語、ドイツ語、ポルトガル語、フランス語、イタリア語、英語――の語彙集が含まれていた。欧州の言語の『華夷訳語』は故宮博物院に写本が残っているだけである。

故宮博物院の『華夷訳語』丁種本はその後長いあいだ公開されず研究に容易に利用することができなかったが、近年そのすべてが故宮博物院編（2018）として影印出版された。『暎咭唎国訳語』はその 18 巻のうちの第 13 巻に収められている。

故宮博物院編（2018）所収の 42 の言語、方言の語彙集は、筆者の見るところによれば、注音の方式に基づいて表 2 に示す 3 類に分けることができる（拙論（2020））。

表 2　故宮博物院蔵『華夷訳語』丁種本の 3 類

	注音方式	収録語彙	語彙集
第1類	1)訳語の音節に基づき注音（小字、合成字を使用） 2)用字を統一	乙種本『西番訳語』の語彙を大幅に増補、項目はすべての語彙集でほぼ共通（約2,100語）	『西番館訳話』（チベット語） 『拉氏諾話』（ラテン語） 『額呼馬尼雅話』（ドイツ語） 『播呼都噶礼雅話』（ポルトガル語） 『弗喇安西雅話』（フランス語） 『伊達礼雅話』（イタリア語） 西洋館訳語
第2類	音節末子音などの表示に小字を使用	多く『華夷訳語』乙種本の語彙をそのままないし調整して使用（約70～1,200語） 『暎咭唎国訳語』は乙種本『西番訳語』に同じ	『暹羅番書』 『緬甸番書』 『蘇禄番書』
第3類	通常の漢字連続による注音		『西番訳語』9種（チベット語方言他） 『暎咭唎国訳語』（英語） 『琉球語』他多数

表 2 に見る通り、欧州 6 言語の語彙集にあって『暎咭唎国訳語』は例外的な位置を占める。英語以外の 5 言語の語彙集は第 1 類に属し、いずれも注音方式が緻密で統一が図られ、収録語彙も 2,000 件超と多く、各冊の開始頁に「西洋館」という編纂組織名の表示がある。それ

---

1 ここでの『華夷訳語』丁種本に関する説明は拙論（2020）における記述に基づく。
2『華夷訳語』の甲乙丙丁 4 種の区別と名称は日中両国の学界で定着している。甲乙丙の区別は石田（1931）に始まる。石田がその後の論文で紹介した『華夷訳語』の新種を大友・木村編（1968）が丁とした。

に対し、『嘆咭唎国訳語』は第3類に属し、注音が単純で収録語彙も700件余りと少なく、「西洋館」の表示も欠く。「西洋館」の表示のある語彙集――以後、「西洋館訳語」と総称する――はいずれも5冊から成るが、『嘆咭唎国訳語』は2冊だけである。

2.2 『嘆咭唎国訳語』の形式と内容

『嘆咭唎国訳語』はより古い『華夷訳語』乙種本の1つであるチベット語の語彙集『西番訳語』[3]に基づいて編まれており――「西番」は“西方の蕃族”、なかんずくチベット人を指す――、形式、語彙ともに共通である。乙種本『西番訳語』と『嘆咭唎国訳語』の様子を図2に示す。

図2 『西番訳語』（左）[4]と『嘆咭唎国訳語』（右）

『西番訳語』の収録語彙は次に示す20の門に分けられており、語彙項目の総数は740である。

天文門、地理門、時令門、人物門、身体門、宮室門、器用門、飲食門、衣服門、声色門、経部門、文史門、方隅門、花木門、鳥獣門、珍宝門、香薬門、数目門、人事門、通用門

故宮博物院蔵の『嘆咭唎国訳語』の写本では第1冊の第1葉が失われ、『西番訳語』にある「天文門」という門名の表示および最初の6つの語彙項目――「天」「日」「月」「星」「雲」「雷」――を欠く。したがって、現在確認できる語彙項目の数は734である。

---

[3] 西田（1970）によれば、乙種本『西番訳語』には3種類の刊本と10種類余りの写本の存在が知られている。中には語彙集と文例集から成るものもあった。
[4] 馬駿良撰『竜威秘書』第九集（刊年不詳、18世紀後半か）所収の版による。

『西番訳語』と『暎咭唎国訳語』の見出し語は基本的に一致する。例外的に不一致の認められる項目は、欠葉のために確認できない6項目を別とし、漢字の字形の差によるものを除けば、次の3つだけである。

路（地理門21）
法妙（経部門112）
当阻（人事門187）

「路」は『西番訳語』では「陸路」であったが、『暎咭唎国訳語』の浄書の段階で「陸」を書き漏らしたか、意図的に「陸」を省いたものである。この項目については後に再び取り上げて検討する。「法妙」と「当阻」はそれぞれ「妙法」「阻当」の各2字が転置した結果である。縦書きで字順の誤解が生じることはまずないであろうが、図2に見る通り『西番訳語』の見出し語は横書きであり、そのために『暎咭唎国訳語』編纂の何らかの段階で混乱が生じたものと考えられる。[5]

したがって、『暎咭唎国訳語』については底本の問題を考える余地はない。解明を要するのは、英語訳とその注音に関わる問題だけであることになる。

なお、『西番訳語』では各門の内部に見出し語が1字の項目と2字の項目が入り混じった形で配置されているが、『暎咭唎国訳語』では門ごとに1字語を先、2字語を後という形に並べ替えている。これはおそらく単に第1類の語彙集における様式に合わせたもので、語彙集の内容に対する実質的な影響はない。[6]

2.3 『暎咭唎国訳語』の顕著な特徴

『暎咭唎国訳語』は、西洋館訳語の各語彙集、すなわち、『華夷訳語』丁種本第1類に属する欧州5言語の語彙集とは性質を大きく異にする。特異とも言えるその顕著な特徴は以下の3点にまとめることができる。

5「妙法」と「阻当」の字順の逆転のほかに、見出し語は誤っていないが、その字順を誤って読んだことに起因すると見られる誤訳の例もある（後述）。

6 項目の並べ替えのもたらした副作用として、すでに先行研究に指摘がある通り（Di（2005）、聶（2019））、『西番訳語』の「地理門」で本来2字語があった位置に繰り上げられた「水」の項目に混乱が生じている。この混乱は、項目の並べ替えが、翻訳と注音の作業が一通り終わった後の段階で行われたことを示している。

なお、項目が見出し語の字数の順に排列されているのは第1類の各語彙集と『暎咭唎国訳語』、加えて、第2類、第3類に属する少数の語彙集だけである。『暎咭唎国訳語』と同じく乙種本『西番訳語』の見出し語を使って編まれた第3類の『西番訳語』9種では見出し語の字数に基づく項目の並べ替えは行われていない。

第1に、英字がしばしば読みにくく、綴りの誤りも多い。

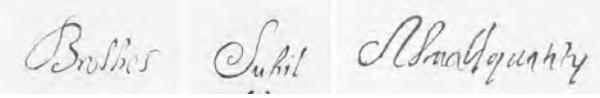

図3 『暎咭唎国訳語』の英字――Brother、Sweet、A small quantity

『暎咭唎国訳語』全体を通じて見れば、英字が整った字形で書かれている箇所もあれば崩れが多く読みにくい箇所もあり、複数の書き手があったかのような印象もある。しかし、読みやすさ、読みにくさの程度は連続的で、しかも、同一箇所に読みやすい字と読みにくい字が共存していたりもするので、書き手の数の問題について確実な判断を下すことはむずかしい。

第2の特徴は、英語訳へのポルトガル語および広東英語、すなわち、ピジン英語の混入である。[7] 以後、語彙集の項目の引用は原則として「見出し語 訳語 注音」という形式とし、門名と影印本での頁数を付記する――故宮博物院蔵の『華夷訳語』丁種本にはいずれも葉数の表示がない――。議論への影響がない限り、訳語の語頭の大文字は小文字に変え、古い綴りは現代化し、綴りの誤りは正して引用する。[8] また、ポルトガル語は斜体字で記す。複合

---

7 一般にピジン英語は18世紀前半に発生したと考えられている。とすれば、『暎咭唎国訳語』編纂時にはすでにピジン英語が存在したことになる。例えば、Shi（1991）は“ピジン英語の発生時期は1699年と1748年のあいだであり、おそらく1715年ごろであろう”と述べている。

西洋人による文献に記録された中国人の話す不正確な英語がピジン英語の例だと無条件に言えるわけではない。ピジン英語の発生を確かめるには、それを中国人と西洋人の双方が意思疎通の手段として使ったことの証拠が必要である。そのような観点からすれば、早くはVan Wely（1912）によって指摘され、現代のピジンの研究において繰り返し間接的に引用される次の1840年代末の対話例がピジン英語に関する現在確かめ得る最初期の記録と言える。文中のwh―eはwhore（売春婦）の一部を伏せ字にしたものである。

> They frequently called out to Jack, (for so the pimp was named); but he answered not a word for some time. At last Jack came creeping in at one end of the tilt, and asked, *Carei grandi hola, pickenini hola?* What size of a wh―e they wanted? The one answered, *Grandi*, the other, *Pickenini*.（2人の英国人は何度もジャック――当の客引きの中国人を2人はそう名付けた――を呼んだが、しばらく一言も返事がなかった。しかし、ジャックはやっとやって来て、「大キイノ女、小サイノ女、ドッチホシイ？」と尋ねた。1人は「大キイ」、もう1人は「小サイ」と答えた。）
>
> （Charles Frederick Noble *An Voyage to the East Indies in 1747 and 1748,* 1762）

張（2007）はこれをピジン英語発生前のピジンポルトガル語の例だとしているが、会話文中のholaは英語のwhoreの転訛形であろうから、とすればポルトガル語の要素を多く残してはいるがすでにピジン英語の段階に入っていることになる。張は2度現れるholaを誤ってgolaとして引用しており、それもポルトガル語だと考えたのかも知れない。

会話文冒頭のcareiはおそらく英語ではない。司（2016）はそれを英語のcarryと解釈し、周（1998）も『紅毛番話貿易須知』で「要」という見出し語の訳語とされている「加利」をcarryと見ているが、Williams（1837）は『紅毛買売通用鬼話』のkah-le――語彙集での表記は「加利」か――をポルトガル語の*querer*（want）と推定している。語義上、後者の解釈のほうが自然である。grandiとpickeniniは確実にポルトガル語の*grande*（big）、*pequenino*（tiny）に由来、関連する表現であろう。

8 綴りを正して引用することには2つの理由がある。1つは、『暎咭唎国訳語』では訳語の綴りに誤脱が

的な訳語の注音は見やすさのために原則として分かち書きする。

如何 *como* 戈磨（人事門 179）
聡明 *entendimento* 掩滴們（人物門 47）
仏教 joss religion 呀斯 列利養（地理門 25）

「如何」と「聡明」はポルトガル語に訳されている――*entendimento* は“理解”の意を表す――。「仏教」の訳語に使われている joss は、神を表すポルトガル語 *deus* に由来するピジン英語であり、John Robert Morrison *A Chinese Commercial Guide*（1834 年）の巻頭に広東特有の英語表現の 1 つとして挙げられている。ピジン英語の混入については次の特徴のところでもさらに例を見る。

第 3 の特徴は、訳語と注音の不一致である。まず、

筆 a pen 貶（文史門 114）
舞 to dance 単些（人事門 165）

のような例では訳語にある冠詞の a、不定詞の to が注音にはない。もっとも、これらは重要性の低い機能語の省略に過ぎない。[9]

注目に値するのは、次のような実質的な不一致がしばしば見られることである。

楪 dish 必列（器用門 70）
敬 honour 利是必睹（人事門 172）
知 I know it 沙被（人事門 169）
不到 He is not come yet 哪敢一（人事門 183）

dish の注音として書かれている「必列」はおそらく plate を注音したものであり、honour の注音として書かれた「利是必睹」は respect を注音したものであろう。[10] また、I know

---

多いために、そのまま引用したのではしばしば何の語か分からなくなることであり、もう 1 つは、筆跡の崩れのために、書かれた通りに引用しようにもそもそも綴りを一意的に復元できない場合がきわめて多いことである。

9 とは言え、このような省略がどのようにして実現したかは実のところはっきりしない。この問題については後に考える。

10 韓（2008）は「必列」を dish の音訳と見て、「必」の字が英語の [di] の注音に使われているとしている。しかし、中国人による [b] と [d] の混同の事例を筆者は知らないものの音声上の共通性を考えればあり得ないとも言えないが、[ʃ] を「列」で注音するということはとうてい考えられない。

it の注音であるはずの「沙被」は“知る”の意を表すポルトガル語（ないしスペイン語）由来のピジン英語 savvy の発音を示し、He is not come yet の注音であるはずの「哪敢一」は No come yet というピジン英語の文の発音を表すものと考えられる。「一」は南方の諸方言では入声の t を保持しており、例えば現代の広東語、客家語、閩南語における読みは jat（= yat)、it などである。[11]

『暎咭唎国訳語』に見られる以上のような特徴はいったい何に由来するのであろうか。その謎を解明するためには、語彙集をどのような人物がどのような方法で編纂したのかという問題を考える必要がある。

3 『暎咭唎国訳語』の編纂に関する従来の諸説

『暎咭唎国訳語』の編纂については従来中国でいくつかの論が発表されてきた。以下にそれぞれの概要を述べ、筆者の考える問題点を述べる。

3.1 単純な中国人編纂説

まず、英語の訳語が読みにくく、綴りに誤りも多いということから直ちに、『暎咭唎国訳語』の編纂は中国人によって行われたと考える素朴な見解がある。

3.1.1 Walter Fuchs (1931) ‘Remarks on a new “Hua-I-I-Yü（華夷訳語）”’

故宮博物院蔵『華夷訳語』丁種本の発見者であるフックスは、その発見を報告した論文で『暎咭唎国訳語』について次のように書いている。

> The English vocabulary 暎咭唎國譯語 does not bear the heading “Hsi-yang-kuan” and differs widely from the other European collections. It consists of only two volumes the English of which is written by a man, apparently a Chinese, who had not mastered the language and who made frequent mistakes.（『暎咭唎国訳語』は冒頭に「西洋館」の表示がなく、他の欧州の言語の語彙集とは大きく異なる。2 冊のみから成り、英語を書いたのは明らかに英語に習熟していない中国人で、誤りが多い。）

---

11 広東語の発音は香港語言学学会粵語拼音方案（略称粵拼）によって表記する（香港語言学学会粵語拼音字表編写小組（2002））。各文字の音価はおおむね普通話の漢語拼音の知識に基づいて判断することができる。ただし、j は国際音声記号（IPA）におけるように接近音を表す。文脈によっては声調を示す 1 ～ 6 の数字を添える。

フックスは英語の書き手が中国人だと言っているだけであるが、中国語の書き手は当然中国人だったであろうから、結局『暎咭唎国訳語』は中国人だけによって編まれたという見方であることになる。

ただし、当の論文は『華夷訳語』丁種本発見の報告であり、『暎咭唎国訳語』を詳しく論じたものではない。フックスが同書に軽く目を通して抱いた表面的な印象を述べたに過ぎないと受け止めるべきであろう。

3.1.2　韓麗娜（2008）『《英吉利国訳語》研究』

これは『暎咭唎国訳語』を主題とした吉林大学の修士論文である。韓は、その第2章で英語の注音における漢字の選択を中国語の方言音声の観点から考察し、結論として次のように述べている。

> 我们可以推测，《英吉利国译语》一书的注音者可能是操粤地方口音的广东人，联系《英吉利国译语》成书时仅广州的十三行与英国存在联系的情况来看，《英吉利国译语》一书的作者很有可能是来自广州十三行的译员或译馆的翻译。（『暎咭唎国訳語』の注音者は広東の方言を話す広東人であろう。『暎咭唎国訳語』成書時に英国と関わりがあったのは広州十三行だけだという状況を考え合わせると、『暎咭唎国訳語』の作者は広州十三行の通訳もしくは翻訳館の翻訳者であった可能性が高い。）

韓はここで『暎咭唎国訳語』の注音の側面について論じているだけであるが、最終的に“『暎咭唎国訳語』の作者は”云々という形で結論を述べていることから、やはり『暎咭唎国訳語』がもっぱら中国人によって編まれたとする見解であると言える。

「広州十三行」とも呼ばれる「広東十三行」は清政府の許可を得て外国貿易に従事した広東の特権的商組織の総称で、組織数には時期による変動があったが慣習的に十三行と呼ばれた（中国歴史大辞典編纂委員会編（1992））。

3.1.3　単純な中国人編纂説の問題2点

しかし、フックスと韓の述べる中国人編纂説には2つの問題がある。

第1に、フックスが“明らかに中国人が書いた”と考えた『暎咭唎国訳語』の英字は、筆者の目には明らかに西洋人の熟練した筆跡に映る。美しい装飾の加えられた例――Arrow、Hand、Prayers、Eat――を図4に示す。

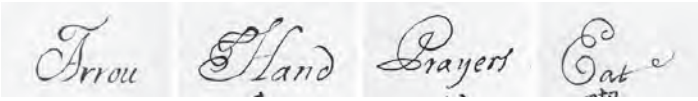

図 4 『喫咭唎国訳語』の英字――美しい装飾

そして、一見分かりにくい筆跡でもその特徴を把握すれば書き手の意図通りに読める例も多い。

図 5 『喫咭唎国訳語』の英字――意図通りに読める癖字

図 5 の最初の例は「東」の訳語で、East である（方隅門 117）。『喫咭唎国訳語』の英字の書き手はしばしば a の字を 2 文字のように左右に分けて書く。また、過去の英語においては小文字の s が縦長に書かれることがあった。ここには逸脱と言うべき要素はない。

第 2 の例は「飛」の訳語 To Fly である（鳥獣門 133）。聶・王（2011）はこれを To Hip と読んで誤記だと考え、『喫咭唎国訳語』に見られる誤りの例示の筆頭に挙げているが、資料の誤読に過ぎない。To の T に不要の横線が書き加えられて F になっているという問題はあるが、Fly には問題がなく、F の次にまず l があり、それに 2 画を離して書かれた y――これも多くの項目に見られる――が続いている。

右端の例は「半夜」の訳語で（時令門 35）、韓（2009）は Halfnight と読んでいるが、これはおそらく Midnight――その d が a のように書かれたもの――である。[12] 韓はほかに「襪」（靴下）の訳語 Stack（衣服門 92）を Sock の誤記だとしているが、実際には stocking の古形である stock の誤綴である。[13]

もっとも、『喫咭唎国訳語』の英字が西洋人の筆跡であることを筆者は確信するものの、その判断は印象、感覚に依存しており、証明がむずかしい。ここでは筆跡に関する判断の正

---

12 当の項目の注音には「密児 乃的」と書かれている。これは midnight ではなく middle night の発音を表しており、訳語と注音の不一致の一例である。

本文で述べた解釈以外に、訳語の第 3 字を見た目の通りに a と受け止めて、ポルトガル語混じりの表現と見る可能性も考え得る。すなわち、midnight とそれに相当するポルトガル語 *meia noite* が混淆し、その *meia* に脱字が生じた結果として *mia* night になったと考えるということである。しかし、midnight の d が誤って a のように書かれたとする見方に比べて解釈が複雑になる。

13 *Oxford English Dictionary* 第 2 版（1989 年）は stock を “A stocking. Now only *dialect.*”（長靴下。現在は方言のみ。）と説明し、15 世紀から 19 世紀にかけての時期の用例を挙げている。なお、訳語が「士達近」と注音されているので、注音者が stock を stocking に変えて注音したという可能性のほかに、当初 stocking と書かれていた訳語が書写時に stock になったという可能性も考え得る。

当化の努力は省き、以後の論述は英字の書き手に関する判断には依存しない形で進める。

単純な中国人編纂説の根源的とも言うべき第2の問題は、『暎咭唎国訳語』の作者が中国人だと言っただけでは、先に見た訳語と注音の不一致の現象（2.3）を説明できないということである。作者が中国人だけであったと考えるかどうかを問わず、『暎咭唎国訳語』の理解のためにはその不一致に対する説明を欠かすことができない。

3.2　訳語と注音の不一致を考慮に入れた諸説

訳語と注音の不一致を考慮に入れた論は4種類ある。その内容を発表年順に確かめる。

3.2.1　Xuan Di (2005) ‘An 18th century English-Chinese dictionary’

Di（2005）は、論文冒頭に添えられた説明と論文末の謝辞によれば、著者が中国社会科学院民俗学与人類学研究所の聶鴻音氏の指導を受けて2003年に書いた卒業論文（筆者未見）を改訂した未刊行の論文である。同研究所の孫伯君氏のご教示によれば、Xuan Diは狄譿（てきけん）、北京外国語大学英語語言文学専攻の卒業生で、故宮博物院で『暎咭唎国訳語』を書写して卒業論文を書いた。Fuchs（1931）の簡単な記述以後詳しい考察の対象とされることのなかった『暎咭唎国訳語』を主題とした、筆者の把握の限りにおいて最初の研究である。しかも、研究史上重要な発言を含んでいるが、以後の研究にはこのDi（2005）への言及が一切見られない。

Di（2005）は――そして、次に取り上げる黄（2010）、聶・王（2011）もまた――英語を見出し語と見るのか中国語を見出し語と見るのかという点に関して記述が一貫していない。しかし、すでに述べた通り中国語が見出し語であることには疑問の余地がないので（2節）、以後その理解を前提として述べる。ちなみに、英語を見出し語と考えては訳語と注音の不一致も説明することができない。例えば、「敬 honour 利是必睹」（人事門172）という項目においてhonourが見出し語であったとすれば、その注音が「利是必睹」、すなわち、respectになることはあり得ない。

狄は『暎咭唎国訳語』の編纂者と編纂過程について次のように述べている。第2の引用は実際には『華夷訳語』丁種本の編纂に関する一般的な記述であるが、括弧内には分かりやすさのために『暎咭唎国訳語』の編纂に特化した説明訳を添える。

> … the English recorded is spoken and written by a Portuguese learner of English.（英訳はポルトガル人の英語学習者によって発音され、書かれた。）
>
> There are at least a written form informant, an oral informant, and a Chinese officer. The Chinese transcription is based on oral input, not on the written form of the

foreign language.（編纂には少なくとも、訳語を英字で書いて提供したポルトガル人、注音のために訳語を口頭で提供したポルトガル人、中国人の役人の 3 人が関わった。注音は第 1 のポルトガル人による筆記ではなく、第 2 のポルトガル人による発音に基づいて行われた。）

ここには 2 つの注目すべき見解が含まれている。1 つは、『暎咭唎国訳語』の編纂にはポルトガル人が関与したというものである。従来、西洋人の関与を論じた研究者はこの狄以外にはいない。狄は第 1 の引用ではポルトガル人を a Portuguese learner of English と単数で表現しているが、第 2 の引用から分かる通り、実際には最低 2 人のポルトガル人が想定されている。

狄のもう 1 つの考えは、見出し語の翻訳は二重に行われたとするものである。すなわち、訳語と注音――正確に言えば、英字で記された訳語と漢字で注音された訳語――は互いに独立して準備されたという見方である。これは訳語と注音の不一致の現象を説明するためのものであり、引き続いて見る黄（2010）と聶・王（2011）においても同じ考えが述べられている――ただし、編纂に西洋人が関与したとする主張はない――。

3.2.2　黄興涛（2010）「《暎咭唎国訳語》的編撰与“西洋館”問題」

黄（2010）の『暎咭唎国訳語』の編纂の問題に関する結論は次の通りである。

关于《暎咭唎国译语》的实际编撰者，笔者赞同福克司的大胆假设，认为它（中略）很可能是中国人所为。不仅如此，笔者还认定它多半是中国广东十三行英语“通事”的杰作，至少是其主要参与的结果。（筆者はフックスの大胆な仮説に賛同し、『暎咭唎国訳語』は中国人によって編まれた可能性が高いと考える。加えて、『暎咭唎国訳語』はおそらく広東十三行の英語通訳が少なくとも中心的に関わって編んだ傑作だと考える。）

笔者甚至因此推测，《暎咭唎国译语》的编撰是先写好了汉字词，然后再请人分别标注英文对译词和汉字发音的，也就是说，其英文书写与汉字注音者很可能并非同一人，而且其英文水平很有限。（筆者は、『暎咭唎国訳語』の編纂はまず中国語の見出し語を書き、英字による訳語と注音による訳語をそれぞれ別の人に依頼することによって行われた、すなわち、英字の訳語を書いた人と注音を行った人は同一ではないと推測する。）

『暎咭唎国訳語』が広東十三行の通訳によって編纂されたとする考えは韓（2008）に一致し、訳語と注音が独立して準備されたとする考えは Di（2005）に一致する。

3.2.3　聶大昕（だいきん）・王洪君（2011）「《暎咭唎国訳語》、《播呼都噶礼雅話》簡介」

聶・王（2011）もまた『暎咭唎国訳語』の訳語と注音は独立して準備されたと考える――論題にある『播呼都噶礼雅話』は西洋館訳語の１つであるポルトガル語の語彙集の書名である――。この論文は、文中の記述によれば、聶の首都師範大学英語系の卒業論文（2006 年）と、聶が王の指導を受けて書いた北京大学対外漢語教学学院の修士論文（2009 年）に基づいている（いずれも筆者未見）。

その結論の主要な部分を引用すれば次の通りである。

> 重要的是，意譯和音譯的程式是分離的，音譯程式的譯者與意譯程式的譯者可以不是同一人，所以音譯程式所記錄的對音漢字可能不是意譯程式的英文筆受所寫下的那個西文詞語而是音譯程式譯者所念的西文詞語。（訳語と注音を準備する処理は分離しており、それぞれにおける翻訳者が同一人物であったとは限らない。そのために訳語と注音の不一致が生じ得ることになる。）

英語で書かれた Nie and Wang（2015）においても同じ考えが述べられている。

3.2.4　聶大昕（2019）「《暎咭唎国訳語》編纂流程考」

聶は『暎咭唎国訳語』の編纂過程に関してその後考えを改めたと思しく、聶（2019）では聶・王（2011）とはまったく異なる考えが述べられている。特に注目すべき箇所を引用すれば次の通りである。

> 《暎咭唎国译语》的释义和译音部分并非同一批人所为，而且两个环节的工作绝不是紧密衔接合作完成的。（『暎咭唎国訳語』の翻訳と注音は相異なる人々によって行われた。そして、それらが密接な連携のもとに行われたわけでもない。）
>
> 本文（中略）还原了《暎咭唎国译语》的五步核心编纂流程。第一步，由“主译”根据《西番译语》按顺序诵读汉语词；第二步，有一组通事根据这些汉语词对译为“广东英语”，并纪录为汉字译音；第三步，有另一组通事将译音形式还原，构拟为外语字母拼写形式，同时对其中出现的不标准形式进行校勘；（後略）（『暎咭唎国訳語』の編纂においては、翻訳主事が『西番訳語』の見出し語を読み上げ、一組の通訳がそれを広東英語に翻訳して注音の形で記録し、その後別の一組の通訳がその注音から英字の綴り字を復元するとともに、標準的でない形式を修正した。）

すなわち、翻訳と注音が完全に独立して行われたとする聶・王（2011）での見方はここでは放棄された。聶の新しい見方は、まず注音の形で訳語が書かれ、それに基づいて英字の綴りが復元された、そして、その復元の際に標準的でない表現が訂正された――その結果とし

て英字で書かれた訳語と注音の不一致が生じた――というものである。

以上の Di（2005）から聶（2019）に至る諸説の当否については、次節における考察の中で検討する。

4 『嘆咭唎国訳語』の編纂者と編纂過程

『嘆咭唎国訳語』の編纂に関わる 2 つの中核的な問題は編纂者と編纂過程である。すなわち、編纂が中国人だけによって行われたのか、西洋人も関与したのかという問題と、見出し語の翻訳と注音の作業がどのように行われたのかという問題である。2 つの問題は無論相互に密接に関係するが、分けて順次考察する。

4.1 編纂者

編纂者の問題に関しては、Di（2005）はポルトガル人の関与を推定したが、その他の研究者はいずれも『嘆咭唎国訳語』は中国人によって編まれたと考えてきた。私見は狄の見解に一致する。

4.1.1 西洋人の関与

『嘆咭唎国訳語』の編纂に西洋人が関与したことは、中国語の知識の不足を示唆する誤訳が多いことから確かめられる。そして、誤訳にはその背景を想像できるものが少なくない。例えば、次のような項目がある。

帽 head 歇（衣服門 91）
念 to grieve 宜里非（身体門 58）
想 to study 実哆的（身体門 58）

「帽」を head、“頭”と誤訳したのは、翻訳の作業を主事した中国人が自分のかぶった帽子を指で指して相手に“これを何と呼ぶか？”と尋ねることによって訳語を求めたことに起因するものと推定される。また、「念」を grieve、“悲嘆に暮れる”、「想」を study、“学習する”と訳しているのは、おそらく物を考える様子を演じて見せたのがそのように受け止められたからであろう。

次のような誤訳からは、見出し語の意味を説明するのに絵を描いて見せるという方法も使われたらしいことが分かる。

鎗 launch 朗煞（器用門 73）
鳴 a singing bird 醒（鳥獣門 133）

「鎗」、すなわち、槍を launch、“投げ付ける”と訳し、「鳴」を“鳴いている鳥”と訳しているのは、人が槍を投げる様子や鳥の鳴いている様子を描いて見せて訳語を求めたものと考えれば翻訳の誤りが理解できる。a singing bird が「醒」、すなわち、sing と注音され、冠詞の a のみならず bird の発音が示されていないことについては後に論じる。

次の組を成す 3 項目における誤訳も、見出し語の意味を描画によって正しく伝えられなかったことによるものと考えられる。

宮殿 in the palace 罷喇色（宮室門 66）[14]
前殿 before the palace 必夥児 罷喇色（宮室門 66）
後殿 behind palace 米興 罷喇色（宮室門 66）

建物を表す「宮殿」「前殿」「後殿」という名詞が“宮殿の中に”、“宮殿の前に”、“宮殿の後ろに”という場所を表す前置詞句に訳されている。

次は形容詞を見出し語とする項目の例である。

軽 a light thing 来 叮（通用門 195）
懶惰 a lazy young man 烈日（人物門 52）

「軽」という形容詞を“軽いもの”と訳しているのは、手近にあった軽いものを手に取ってその軽さを仕草で示すなどして訳語を求めたからであろう。「懶惰」を“懶惰な若者”と訳しているのも、何らかの方法によって懶惰な人物の様子を示したものと想像される。ここでも注音に young man に相当する部分がないが、これについては後に述べる。

次のような項目でも、見出し語に関係はするが意味のずれた訳語が記されている。

罪 a murderer 馬達辣（通用門 193）
願 I am content 貢叮爹（人事門 171）
為 to do anything 擬里弩（人事門 173）[15]

---

[14]「宮殿」と「前殿」の訳語に含まれる定冠詞の the は実際には y^e と書かれている。y^e は、the のソーン（thorn）þ を用いた表記 þe から誤解によって生じた表記である。「後殿」の訳語には the がない。
[15]「擬里弩」という注音は訳語との関係が不透明である。訳語と不完全ながら対応しているとすれば

「罪」が“殺人者”、「願」が“私は満足している”と訳されている。「為」が“何でもする”と訳されているのは、行為全般を表す「為」の意味は演技や描画では伝えられないことから、あらゆる行為を表すという趣旨の説明を口頭で行ったからではないかと考えられる。

以上のような誤訳の事例から、『暎咭唎国訳語』の訳語は、中国語の知識の乏しい西洋人が中国人から見出し語の意味について説明を受けつつ答えるという形で提供したものと推定される。[16]

4.1.2　ポルトガル人の関与

そして、その西洋人の素性については、『暎咭唎国訳語』が英語の語彙集であり、そこにポルトガル語の訳語が混じっていることから、英国人かポルトガル人のいずれかであった可能性が高いことになる。しかし、英国人が英語の語彙集にポルトガル語の訳語を含めることは考えられない。したがって、当の西洋人はおそらく一定の英語の知識を有するポルトガル人であったと推定される。

実際、ポルトガル人の関与を示す音韻上の証拠が2つある。その第1は、語頭のｓ＋子音という形の子音連続の前への母音ｉの付加である。その現象を現代ポルトガル語辞典で確かめると次のような事例がある。

esporte (sport)、*estação* (station)、*estrada* (street)、*esqui* (ski)、*esquilo* (squirrel)、*Estocolmo* (Stockholm)、*Escócia* (Scotland)、*Eslováquia*（Slovakia）

『暎咭唎国訳語』にはこれに類する注音が見られる。

煙 smoke 意事莫（天文門 7）

---

any do の発音を示しているのではないかと考えられる。

16 次の2項目における誤訳は、本文で見た誤訳の諸例とは事情が異なると考えられる。ここでも the は実際には y^e と書かれている。また、いずれの項目においても訳語の注音に不足がある。

領長 take the long piece 滴咭 朗（衣服門 97）

領短 take the short piece 滴咭 薩（衣服門 97）

「領長」と「領短」に対して西田（1970）はそれぞれ long robe、short robe（長い服、短い服）という英訳を与えているが、聶・孫編著（2010）は high collar、short collar（高い襟、短い襟）と訳している。西洋館訳語の5種類の語彙集（2.1）における訳語はいずれも意味上後者に一致ないし近似し、長短の“襟”、“スカーフ”、“ネクタイ”などと訳している。そのように衣服の首回りの部分に関わる名詞が、『暎咭唎国訳語』では“長いものを取る”、“短いものを取る”という意味の動詞句として訳されている。これはおそらく、中国人が当の2語を知らず、「領」を受領の意の動詞に解し、長さの異なる2つの何かを人から受け取る様子を演技や描画によって西洋人に示したということであろう。西洋人が自身の漢字の知識に頼って逐語的に訳したということも可能性としては考え得るが、そのような解釈は『暎咭唎国訳語』の編纂に関わる筆者の理解には適合しない。

泉 spring 厄士避領（地理門 15）
街 street 衣実跌列（地理門 22）
春 spring 以士必領（時令門 27）
椽 small beam 夜士摩 命（宮室門 64）
硯 an ink stand 鷹咭 意吐胆（文史門 114）[17]

文字には smoke と書きつつ、ismoke と発音しているのである。s ＋子音で始まる語の発音を苦手とする人物であったことが分かる。中には i の母音を加えずに発音した事例もあるが、i を加えた事例が十数例ある。[18]

ポルトガル人の関与を示す第 2 の音韻的な事実は子音の h に関わる。ポルトガル語では基本的に綴り字中の h を発音しないという事実が背景にある。

豊足 a fine harvest 分 亜喇尾士（人事門 185）

この例では harvest の h を落とした発音に基づいて注音が行われている。すなわち、ポルトガル人は harvest と書きながら、arvest と発音したということである。[19]

逆の性質の事例もある。すなわち、h の要らないところに h を加えた事例である。まず、

勢大 a great army 格列 哈児米（人事門 188）

においては、army と書きつつ、h の子音を加えて harmy と発音している。また、

油 hoil 噯児（飲食門 88）
甘 suhit 蘇噫（飲食門 89）
執 take hup 得極（人事門 170）

においては、発音は正しく行われているが――「噯」の現代広東語での発音は oi2、oi3 など――、綴り字に不要の h が加えられ、oil が hoil、sweet が suhit、take up が take hup と書かれている――この suhit は図 3 に読みにくい訳語の例の 1 つとして示したものであ

17「吐」は「吐」の誤記、誤写であろう。
18 韓（2008）は“s で始まる語の前に [i] を加える現象”があると書いているが、i の付加は語頭の s ＋子音の前の環境に限った現象である。s ＋母音の前に i が加えられた例はない。
19“豊富、満ち足りた”の意を表す見出し語「豊足」を“すばらしい収穫、豊作”のように訳しているのは誤訳であろう。

る――。こうした発音ないし綴りへの無用のhの付加は、英語とポルトガル語のhに関わる違いを知るポルトガル人による過剰修正の結果と解釈することができる。

ちなみに、西洋人の母語の如何の証拠にはならないが、訳語における英語とポルトガル語の混用が多く見られる。

士官 mandarin *do* army 漫達領 達 吖耳馬（人物門 45）
模様 a *mostra* 嚩実達（身体門 61）
甘松 *resina de* pine 列仁拏 氷奴（香薬門 155）[20]

「士官」の訳語の *do* は *de*（= of）＋ *o*（= 男性名詞に付く定冠詞）の短縮形であり、“A *do* B”というポルトガル語の表現型に mandarin と army という英語の内容語を入れた形になっている。[21]「模様」の訳語 a *mostra* はそれとは逆に、内容語のほうがポルトガル語である。「甘松」の訳語 *resina de* pine はそのいずれとも異なる種類の英語とポルトガル語の混在の例である。

なお、ここに言うポルトガル人はポルトガル本国で生育した人物ではなかった可能性がある。と言うのは、『唎咭唎国訳語』には例えば「苦 *marga* 碼児加」（飲食門 89）という項目があるからである。この *marga* はおそらく植民地のポルトガル語で――標準的なポルトガル語では *amarga*（ないし *amargo*）――、スリランカのポルトガル語の語彙文例集である John Callaway *A Vocabulary, In the Ceylon Portuguese and English Languages, With a Series of Familiar Phrases*（Colombo: Wesleyan Mission Press, 1820）や、Kramer（2016）におけるパピアメント語――西インド諸島の一部の島で使われているクレオール言語――に関する記述中に見出される。また、「敬拝 selam 沙懶」（人事門 176）という項目における訳語 selam は“敬礼”を表すアラビア語起源の語――英語では salaam――ではないかと考えられる。当の語は英語にもあるくらいなので当時のポルトガル人が知っていたとしても不思議はないが、そのような外来語を対訳語彙集における「敬拝」の訳語とするということ自体が翻訳者の言語的背景の反映である可能性がある。ただし、ポルトガル人の生育地を論じるには、ポルトガル語の方言や変種に関する知識に基づいて『唎咭唎国訳語』のポルトガル語による訳語を全面的に吟味する必要がある。

---

20 薬草名の「甘松」を *resina de* pine、“松脂”と訳しているのは誤訳であろう。
21 英語 army に相当するポルトガル語 *exército* は男性名詞である。ただし、英字が判読しにくく、*do* は *da* である可能性がある。その場合は、*de* ＋ *a*（= 女性名詞に付く定冠詞）であることになる。当該箇所の注音が「達」であることは確実な判断材料にならない。単純に考えれば「達」は *da* を表すと考えるのが自然であるが、*do* の発音が後続の army の影響によって *da* のように聞こえたという可能性も考え得るからである。

4.2　編纂過程

編纂過程の考察は、先に見た先行研究の見解の再確認から始める。

4.2.1　従来の説の再確認

訳語と注音の不一致を考慮に入れていない説を除くと、従来の見解は不一致の説明方法に関して２類に大別することができる。

第１は Di（2005）、黄（2010）、聶・王（2011）に共通する見解であり、推定された編纂過程を図６のように図式化することができる。

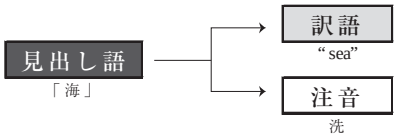

図６　『唜咭唎国訳語』の編纂過程に関する見解――訳注独立説

すなわち、中国語の見出し語「海」を一方で sea と翻訳して英字で記し、他方、その作業とは無関係に翻訳して「洗」と注音したと考える。訳語と注音が別々に準備されたと考えることにより、訳語と注音の不一致が説明できるとする。訳語と注音が相互に独立して準備されたと考えるこの見解を便宜上「訳注独立説」と呼ぶ。

第２の見解は聶（2019）のもので、編纂過程を図７のように表すことができる。

図７　『唜咭唎国訳語』の編纂過程に関する見解――先注後訳説

この考えによれば、まず翻訳の結果を注音の形で記し、そこから英語の綴りを復元した。そして、綴りの復元時に標準的でない表現を修正した。すなわち、「洗」の注音はそのまま使って sea と書いたが、ピジン英語の savvy を表す「沙被」という注音（2.3）は採用せず、翻訳し直して I know it と書いた。その再翻訳によって訳語と注音の不一致が生じたとする。先に注音し、後に訳語を書いたと考えるこの見解を「先注後訳説」と呼ぶ。

4.2.2　訳注独立説の困難

さて、まず訳注独立説について言えば、語彙集の編纂者が訳語と注音を分けて準備すると

いう非効率な方法を選ぶものだろうかという常識の次元の疑問もあるが[22]、それよりもはるかに重大な問題がある。それは、訳語と注音は大多数の項目において一致しているという事実である。

例えば次のような項目が注目すべき事例の1つである。

就 very close 密裏 哥羅些（人事門 171）

「就」の語は多義的であるので、そしてまた、そのうちの特定の語義に限定するとしても、本来相異なるさまざまな翻訳が可能なはずである。それにもかかわらず、訳語の very close と注音の「密裏 哥羅些」がきれいに対応している。このような一致は偶然によっては生じ得ない。

次のような例では訳語と注音がともに誤訳で一致している。

杓 dish 低士（器用門 71）
許 promise 巴攬士（通用門 194）
道 travel 達喇勿（地理門 16）
遠 great way 孽列 唉（地理門 17）

「杓」を dish、「許」を promise とする誤訳が訳語と注音とで一致している。「道」を travel、「遠」を great way と訳すのもほぼ誤訳であり――もし誤訳という評価を避けるとしても、より適切な訳語がほかにあったはずである――、やはり訳語と注音が一致している。

次は訳語と注音がともにポルトガル語である、ないし、ポルトガル語を含む例である。

如何 *como* 戈磨（人事門 179）
聡明 *entendimento* 掩滴們（人物門 47）
飲食 drink *comer* 低領咭 個迷（飲食門 89）[23]

---

[22] Di（2005）は『白馬訳語』の編纂においては現に訳語と注音の準備が独立に行われたとする分析を述べている。例が1つしか挙げられていないこともあり、筆者にはその妥当性を判断することができないが、かりに分析が正しいとしても、『暎咭唎国訳語』と『白馬訳語』の編纂方法は相互に独立した問題であり、同列に論じることはできない。実際、筆者の推定によれば、『暎咭唎国訳語』の編纂方法は西洋館訳語の語彙集のそれ（拙論（2020））とは大きく異なる。

なお、『白馬訳語』は故宮博物院蔵『華夷訳語』丁種本第3類に含まれる『西番訳語』9種（表2）の1つである。早くは西田・孫（1990）による研究があり、故宮博物院編（2018）ではその第3巻に『川番訳語（第四冊）』として収められている。

[23] *comer* は一見 *coma* に見える筆跡で書かれている。「食 *comer* 哥滅」（鳥獣門 133）では *comer* と書

英語の語彙集である以上本来英語に訳さなければならないにもかかわらず､「如何」と「聡明」では訳語、注音ともに共通のポルトガル語になっている。「飲食」の項目では、「飲」を英語、「食」をポルトガル語によって逐字的に訳しており――これは英語だけで drink eat と訳したとしても不適訳であるが――、それが訳語と注音で一致している。

したがって、訳注独立説は大多数の項目における訳語と注音の一致という重要な事実を説明することができないことになる。言い換えれば、訳注独立説は語彙集を見る者の注意を引きやすい訳語と注音の不一致の事例にのみ着目した判断の結果だということである。

4.2.3　先注後訳説の困難

先注後訳説にもまた重大な困難がある。そのことは 2 つの角度から説明することができる。

第 1 の問題は、注音から綴りを復元することはほぼ不可能だということである。

英語の綴りと発音の対応にはよく知られた複雑性がある。例えば、/rait/ という音形の語は right、write、rite、wright とさまざまに綴られる。加えて、『暎咭唎国訳語』の注音では同一の漢字がしばしば英語の複数の発音を表すのに使われている。例えば、次のような事例では 1 つの漢字が 2 ～ 3 種類の発音に対応している。

穩：風 wind 穩（天文門 4）、酒 wine 穩（飲食門 86）
嗹：雨 rain 嗹（天文門 4）、瘦 lean 嗹（通用門 194）
哈：心 heart 哈（身体門 57）、鷹 a hawk 哈（鳥獣門 129）、猪 a hog 哈（鳥獣門 132）

漢字によっては注音上の多義性がさらにはるかに大きい。頻繁に現れる「列」の字は、英語の /l/、/li/、/le/、/ri/、/re/、/rei/、/rai/、/ri:d/、/red/、/leit/、/reit/、/dei/ などの広範囲の発音の注音に使われている。したがって、例えば「必列」という注音を見ても、それが peel、pill、bill、pale、play、pray、plate、bread、plead などの語のいずれを表しているのか知りようがないことになる。

見出し語と注音の形で書かれた訳語を見て英語の綴りを復元するというクイズめいた課題に取り組むには英語の豊富な知識が必要である。そうした知識を備えた人物は当時いなかったであろうし、かりにいたとすれば注音を見ないで直接翻訳したほうがはるかに効率的であったはずである。と言うよりも、そのような人物がいれば一人で訳語と注音を書くことができ、そもそも翻訳を広州十三行の通訳――私見ではポルトガル人であるが――に頼る必要もなかった。

かれ、両項目で mer の注音も一致する。

第2の問題は、訳語と注音が一致しない場合の両者間の関係は多様だということである。具体的には以下で見る通り、必ずしも訳語が標準的な英語になっているわけではなく、逆に、注音が正しく、訳語のほうに問題があることも多い。先注後訳説はそのような事例に対してはまったく無力である。

したがって、先注後訳説も有効な説明にはならない。先注後訳説は、もっぱらピジン英語の混入した項目にのみ着目した判断の結果であると言える。

『暎咭唎国訳語』の編纂過程の推定は、語彙集全体を見て総合的に考えるという方法によって行わなければならない。

4.2.4　編纂過程に関する私見

筆者の推定する『暎咭唎国訳語』の編纂過程の概略は次の通りである。すなわち、まず中国語の見出し語の翻訳と注音がポルトガル人の支援を受けて行われた――翻訳と注音はもちろん同時的に行われた――。そして、その後広東英語を知る校閲者が自身の英語の知識に基づいて一部の項目の注音を書き換えた。その際、校閲者は英字で書かれた訳語を書き換えるための知識を持たなかったために、漢字による注音だけを書き換えて訳語はそのまま残した。その結果として訳語と注音の不一致が発生した。

この考えを図式化して示せば図8のようになる。

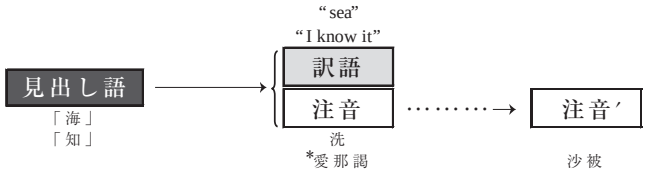

図8　『暎咭唎国訳語』の編纂過程――私見

「海」の場合は、それがseaと訳されると同時に「洗」と注音され、その形で最終的に決着した。それに対し、「知」の場合は、まずI know itと訳され、同時に「愛那謁」（推定）などのように注音されたが、事後の段階において校閲者が注音を「沙被」（savvy）に書き換えた。

筆者のこの見解に、従来の2種類の説と同様に名を与えるとすれば、「注音校訂説」である。訳語と注音の準備が一通り終わったあとで、校閲者が一部の項目の注音に手を加えたということである。

ただし、実際の校訂の過程は多少異なったものであったということも考えられる。以上の説明は、注音の書き換えが注音者とは異なる人物によって行われたとの想定に基づいている

が、注音者自身が校訂を行った可能性も排除できないからである。すなわち、いったんポルトガル人の話す通りに書き留めた注音者があとで自身の知識に基づいて書き換えたなどの可能性である。しかし、限られた情報に基づいて編纂の過程を精密に推定することはむずかしい。もし訳語と注音が一致している場合と一致していない場合とで注音字の選択に明確な差があるという事実が確かめられれば注音者と校閲者が別の人物であったことの証拠になるが、確認の限りではそうした差を見出すことはできなかった。

4.2.5　校訂の種類

訳語と注音の不一致を生み出した、校閲者による注音の書き換えにはいくつかの種類のものがある。

(A) 訳語の訂正、改善

まず、訳語の訂正ないし改善を目的とすると見られる注音の書き換えがある。例えば、次のような事例がある。

布 cotton stuff 葭喇時（衣服門 94）
水晶 water colour stone 嫁喇撒士墜（珍宝門 145）
誰 him 呼（人事門 164）
人夫 a lady 姑厘（人事門 182）

最初の例では、「布」が cotton stuff、“木綿のもの”と訳されたのを、注音では「葭喇時」、すなわち、cloth に変えている。第 2 の例では、「水晶」が water colour stone、“水の色の石”と訳されたのを、注音では「嫁喇撒 士墜」、すなわち、glass stone、“ガラス石”に変えている。第 3 の例では、「誰」が誤って him と訳されたのを、注音では「呼」、すなわち、who に訂正している。[24] 第 4 の例の a lady という訳語はおそらく見出し語の「人夫」を「夫人」と見誤ったことに起因する誤訳であろう。注音ではそれを「姑厘」、すなわち、coolie、“苦力”に訂正している。[25]

---

24 ただし、「誰」を him に誤訳するということは考えにくいので、この事例は後の浄書の段階で生じた混乱であるのかも知れない。すなわち、直前の項目は「他 he 喜」であるが、そこに当初訳語として him も併記されていた、それが誤って who の訳語として書かれてしまったということかも知れない。もしそうだとすれば、「誰」の項目は本来正しく「誰 who 呼」と書かれていたと推定され、校閲者による訂正の事例ではないことになる。

25 現に『西番訳語』において対応する位置にある項目は「人夫」である。それにしても、縦書きの「人夫」が「夫人」と誤読されることは考えにくいので、翻訳の作業の段階では図 2 に見る『西番訳語』のように見出し語が横書きだったのであろう。

次のような事例では訳語中のあってはならない要素が省かれている。

懶惰 a lazy young man 烈日（人物門 52）
漆 lacquered wan 猟葭（器用門 71）
鳴 a singing bird 醒（鳥獣門 133）

「懶惰」の“懶惰な若者”という不適切な訳語から無用の“若者”を省いて「烈日」、すなわち、lazy としている。同様に、「漆」が“漆塗りの椀”と訳された――訳語に含まれる wan は中国語の「椀」であろう――のを「猟葭」、すなわち、lacquer とし、「鳴」が“鳴いている鳥”と訳されたのを「醒」、すなわち、sing とすることによって訂正している。

次の項目における注音の書き換えもやはり誤訳の訂正と見ることができる。

別 to take leave 阿達（人事門 164）

訳語の to take leave は「別」を“別れる”の意の動詞に解したものであるが、校閲者はそれを“別の”という意味に解して注音を「阿達」、すなわち、other に変更している。この項目だけを見たのでは訳語が誤りだとも言えないが、この項目は代名詞類と「自」の項目の直後に配置されており、校閲者はそれらとの対比において“別の（人）”のような意味が意図されていると考えたのではないかと思われる。実際、語彙項目が大幅に増補された『華夷訳語』丁種本第 1 類の語彙集（2.1）では、「別」の項目は「自」「諸」「其」の 3 項目に続けて配置されている。

以上のような事例においては、いずれも注音の表現が適切な翻訳で、英字で書かれた訳語のほうに問題があるという関係にある。すなわち、“注音に問題があれば訳語で訂正した”とする先注後訳説には正面から衝突することになる。

(B) ポルトガル語から英語への変更

次に、ポルトガル語の訳語を英語の訳語に置き換えた項目がある。

弟 *irmão menor* 仰模羅達（人物門 41）
明緑 *verde claro* 加喇宜嗹（声色門 102）
浄 *limpíssimo* 密里咭嗹（人事門 187）

「弟」「明緑」「浄」がポルトガル語に訳されたのを、注音では英語の表現に変更している。

すなわち、「仰 模羅達」は young brother、「加喇 宜嗹」は color green、「密里 咭嗹」は very clean であろう。

こうした事例においても、英語の語彙集における翻訳として適切なのは訳語ではなく注音のほうである。やはり先注後訳説に矛盾する事実である。

次に示す「拝」の項目においても同様にポルトガル語の訳語が別の訳語に変更されている。

拝 *venerar* 納歇（人事門 173）

この注音はおそらく「納 歇」、knock head であろう。同じ注音が「叩頭」の項目でも誤訳の訂正に使われている。

叩頭 make a bang 納歇（人事門 183）

ここでは“額を地に付けて拝礼する”ことを表す「叩頭」が“（大きな音がするほど）たたく”と誤訳されたのを、やはり「納歇」、knock head に訂正している。[26]

なお、次の例はポルトガル語の訳語に対する注音に英語の表現の注音を加えた形になっている。

日 *dia* 笋爹亜（時令門 29）

すなわち、「日」を *dia* と訳して「爹亜」と注音していたところに、校閲者が「笋」、すなわち、sun を書き加えた、あるいはむしろ、校閲者は「爹亜」を「笋」に書き換えたつもりだったが、浄書時に両方が書写されてしまったということではないかと考えられる。[27]

---

26 聶・王（2011）は「拝」の項目における注音の「納歇」を nod head だとしているが、「叩頭」の項目との関係も考えれば、単にうなずくということではなく、額を地に付けて拝むということであろう。時代は下るが、Samuel Wells Williams *A Tonic Dictionary of the Chinese Language in the Canton Dialect*『英華分韻撮要』（1856（咸豊 6）年）は「叩」の項目で次のように説明している。ここには「叩頭」のほか、knock head と kotow という英語表現が出て来る。

叩 K'au To ask; to prostrate, to knock head on the ground, when saluting a superior or in worship; （中略）; *k'au t'au,* the kotow; *sam kwai kau k'au,* three kneelings and nine knockings —the highest act of worship;（後略）（求める；敬礼または礼拝の際にひれ伏す、額を地に付ける；「叩頭」、英語の kotow；「三跪九叩」、3 度跪き 9 度額を地に付ける—最高の敬礼法）

なお、編纂を主事した中国人が「叩頭」という表現を知らなかったのか、また、校閲者の英語の知識に knock head のような表現が含まれていたのかという 2 つのことが疑問として残る。

27 ただし、「日」の項目における「笋」、sun の追加は一種の誤訳である。この「日」は「時令門」に時間表現の 1 つとして挙げられているもので、正しくは sun ではなく day を使う必要があった。

注音の追加の事例には、英語の表現の注音にさらに別の表現を加えたものもある。

(C) 正統な英語からピジン英語への変更

正統な英語から校閲者のなじんだピジン英語への変更の事例もある。特に目を引くのは、ピジン英語に固有の表現、いかにもピジン英語らしい表現への書き換えである。

まず、ポルトガル語やスペイン語に由来する語の例がある。

神 spirit 呀是（経部門 107）
知 I know it 沙被（人事門 169）
傘 umbrella 咭的梭（器用門 77）

「神」を表す「呀是」は joss、「知」を表す「沙被」は savvy である（2.3）。「傘」の項目に注音として書かれた「咭的梭」は、Hill(1920) の記述を参考にして判断すれば、日傘を表すスペイン語起源の語であろう。Hill がスペイン語の quitasol に由来する広東英語として kittysol とローマ字化して示し、“柄と骨を竹で作り、油紙を張った中国と日本の傘”、すなわち、唐傘として説明しているのがこの「咭的梭」だと考えられる。[28]

また、正統な英語から文法上あからさまに逸脱した言い回しの例もある。

不見 I have never seen him 那西（人事門 181）
不到 He is not come yet 哪敢一（人事門 181）
是我 It is me 買（人事門 186）

「不見」を意味する「那 西」は No see、「不到」を意味する「哪 敢 一」は No come yet である（2.3）。第 3 の例の「買」は my である。It is me の me を my に変えるのは一見不可解なことであるが、Williams（1836）には my を主格に用いた広東英語の文例が挙げられている。また、Hill（1920）は、広東英語の my は格、数の如何を問わない一人称代名詞であり、英語の I cannot を My no can、pay me を give my と言うと説明している。

次のような事例においても、注音で示されているのはおそらくピジン英語において生じた表現であろう。

地 ground 餓朗乾的利（地理門 13）

「餓朗」が ground の注音で、そこに「乾的利」、すなわち、country が追加されている。これについても、校閲者の意図は追加でなく変更であった可能性もある。こうした注音の追加は、筆者の見落としがなければ、「日」と「地」の項目に見られるだけである。

28 日傘はポルトガル語では *guarda sol* となる。「咭的梭」という注音の「咭」の字はここでは [ki] という発音を示していると見られ、スペイン語 quitasol の発音に適合する。

永遠 many years 梭暮你以呀朗（時令門 35）
真実 It is very exact 度魯俺度魯（人事門 178）
全 total 亜喇列示（人事門 172）
衆 a crowd of people 没住亜喇蛮（人事門 173）
相同 the same sort 亜喇完所（人事門 185）

「永遠」と「真実」の各項目に注音として書かれた「梭 暮你 以呀 朗」と「度魯 俺 度魯」はそれぞれ so many year(s) long、true and true であろう。それ以外の例における、訳語に明らかに一致しない注音がそれぞれどのような表現を表しているのかは詳らかでないが、「亜喇 列示」は all this、「没住 亜喇 蛮」は much all man、「亜喇 完 所」は all one so（ないし sort）といったところかも知れない。

次のような事例においては、標準的な英語では必要のない副詞が追加されているものと見られる。

来 to come 甘朗（人事門 166）
走 to run 輪唆（人事門 167）

各項目の注音はおそらく「甘 朗」、すなわち、come along、「輪 唆」、すなわち、run away であろう。

以上のような書き換えの場合には訳語が標準的な英語、注音が非標準的な英語という関係にある。先注後訳説が通用するのはこの種の事例だけである。

ピジン英語がすべてピジン英語に固有の表現で構成されているわけではない。次に示すような事例では書き換え後の表現も正統な英語の要素である。しかし、これらも校閲者の知るピジン英語の一部だったということではないかと考えられる。

起 to rise 擬勒（人事門 168）
遅 very slowly 都列（人事門 170）
可惜 to grieve 沙厘（人事門 180）

「起」の項目では、to rise を「擬 勒」、すなわち、おそらく get up に変え、「遅」では“遅く、ゆっくり”から“遅い、遅すぎる”の意の「都 列」、すなわち、too late に変えている。「可惜」では動詞の grieve を「沙厘」、すなわち、平易な形容詞の sorry に書き換えている。こうした事例においては、注音で示された表現が正統な英語でそのまま通用する。したがって、

これらも先注後訳説では説明の付かない例となる。

なお、次の「銀」の項目の注音における書き換えは結果的に誤訳となっている。

銀 silver 捫你（珍宝門 142）

「銀」は「珍宝門」で金属の名称の 1 つとして挙げられており、英字で記された silver という訳語が正しいが、校閲者はそれを「捫你」、すなわち、money に書き換えている。見出し語の語彙集中での位置付けを考えることなく書き換えたために不適切な訳語になっているわけであるが、校閲者が「銀」という語を見てまず念頭に浮かぶのが貨幣の意味だったということであろう。そして、それはまた、語彙の限られたピジン英語には金銭を表す語はあっても金属の種類を表す語はなかったということでもあるかも知れない。

（D）表現の簡略化

次のような事例は校閲者が不要と判断した訳語中の要素を省いたものと見られる。いずれも訳語にある修飾語の類が注音にはない。

盆 soup dish 里是（器用門 70）
宿 a bird's roost 魯叔（鳥獣門 133）
照例 old custom 格参（通用門 197）

「盆」の soup dish という訳語からは soup を省いて dish だけの注音としている。「宿」では訳語 a bird's roost から a bird's、「照例」では訳語 old custom から old を省いた形の注音としている。

「宿」と「照例」については見出し語と翻訳の対応に問題があるが、いずれの例においても注音に示された表現自体には不足がない。したがって、先注後訳説を前提として考えれば、注音に問題がないのになぜ訳語にわざわざ修飾語を加えたのかという問題が生じることになる。

ただし、表現の簡略化については、その発生の経緯に不透明な要素がある。訳語に含まれる機能語が注音にない項目の例はすでに見た（2.3）。この種の事例は非常に多い。

馬 a horse 哈実（鳥獣門 131）
外 the outside 欧曬（方隅門 120）
前殿 before the palace 必夥児 罷喇色（宮室門 66）

打 to beat 密（人事門 171）

これらの例においては訳語にある冠詞や不定詞の to が注音にはない。[29] 同様の状況は見出し語がポルトガル語に訳されている項目にも見られる。

粉紅 *cor de carne* 哥児 乾尼（声色門 102）

「粉紅」、すなわち、“桃色、ピンク”がポルトガル語を使って *cor de carne*、すなわち、color of flesh（meat）、“肉の色”と訳されているが、そこに含まれる前置詞の *de* が注音にはない。

注音における機能語の不在は重要度が低いと見なされた要素の省略の結果であろう。しかし、そう言っただけではすませることのできない問題がここにはある。その省略を誰がどのようにして行ったのかということである。校閲者が省略を行うには、例えば「前殿」の訳語が「必夥児達罷喇色」などと注音され、「粉紅」の訳語が「哥児的乾尼」などと注音されているのを見て、まずそれを単語に分解し、そこに含まれる「達」「的」が機能語の the や *de* であることを見抜く必要があるからである。しかし、ピジン英語を話す校閲者が、そのような作業を行えるまでに正統な英語とポルトガル語に通じていたとは考えられない。そしてまた、同様の理由により、注音の段階で簡略化が行われたということも考えられない。

機能語の省略が注音者や校閲者によるものではないとすれば、ポルトガル人が完全な訳語を書きつつ、口頭では機能語を省いて読み上げたという可能性を考えなければならなくなる。しかし、句頭の冠詞や to はともかく、句中の機能語を省いて読むということもまた少々想像しにくく、残念ながら真相は不詳とせざるを得ない。

(E) その他の変更

以上の分類に収めにくい書き換えの事例もある。

まず、次のような項目では、問題のない訳語の注音を別の表現に書き換えている。

入 to go in 甘引（人事門 168）
敬 honour 利是必睹（人事門 172）

---

[29] 冠詞はあらゆる項目の訳語の注音において省かれており、例外はおそらく次の 1 項目だけである。
今日 the *dia* 的 礼亜（時令門 33）
不定詞の to も多くは省かれているが、いくつかの項目では注音されている。
請 to invite 多 因唛（人事門 167）

「入」では訳語の go in が注音では「甘 引」、すなわち、come in に書き換えられている。「敬」では、honour が「利是必睹」、すなわち、respect に変更されている。校閲者が使い慣れた表現に変更したということかとも思われるが、確かなことは言えない。

また、次のように英語の訳語とポルトガル語の注音という組合せになっている事例も少なからずある。

塵 dust 波児咤（地理門 22）
昼 day 礼耶（時令門 31）
太平 a(ママ) peace 巴士（人事門 182）

「塵」は訳語は英語の dust であるが、注音ではポルトガル語によって「波児咤」、おそらく、*poeira* とされている。同様に、「昼」の訳語 day に対応する注音は「礼耶」、すなわち、*dia*、「太平」の訳語 a peace に対応する注音は「巴士」、すなわち、*paz* である。

こうした事例をどのように理解すればよいかも判断がむずかしい。筆者に考え得る解釈は 3 つある。その第 1 の候補は、ポルトガル人が訳語を英語で書きつつポルトガル語で読み上げたというものである。現にそのようなことが行われたと考えられる事例がほかにあるからである（後述）。さもなくば、校閲者の知るピジン英語にそのようなポルトガル語の表現が混じっていたか、校訂の作業は注音だけでなく訳語についても行われたということであろう。しかし、判断のための証拠が乏しく、そのいずれであるとも決しがたい。

4.3　編纂の作業と分担

筆者の考える『暎咭唎国訳語』の編纂過程は以上に述べた通りであるが、ここであらためてそれを編纂者の作業分担の観点から見直すことにより、編纂の状況を可能な範囲でより具体的に復元する。

『暎咭唎国訳語』の編纂においては各項目について以下の一連の作業が行われたと考えられる。

1）中国人が見出し語を読み上げ、その意味を身振りや描画も使って説明した。
2）ポルトガル人がそれに基づいて翻訳し、訳語を筆記するとともに読み上げた。
3）中国人が訳語の読み上げを聞いて漢字で注音した。
4）広東英語を知る中国人校閲者が事後に注音を校訂した。

これらの作業を分担して行った人の正確な数は分からない。1 で見出し語を読み上げた中

国人はおそらく英語を知らなかったであろうから――もしピジン英語を知っていれば訳語にその反映が観察されてもよさそうなものであるがそれがほとんどないので、当の中国人はもっぱら中国語で話したものと推定される――、4の校閲者とは別人だと考えられる。また、1の段階の作業には見出し語を説明するための絵を描く任務を担った中国人も関わった――同一人物が見出し語を読み上げ、絵も描いたということも考えられなくはないが、ここでは議論の簡潔のためにその可能性は除外して考える――。1の見出し語の読み上げと3の注音、もしくは、3の注音と4の校閲は同一人によって行われた可能性もあり得る。

したがって、作業者数の最小の見積もりは、見出し語の読み上げと注音を行った中国人、絵を描いた中国人、翻訳を行ったポルトガル人、校閲を行った中国人の4人――もしくは、見出し語を読み上げた中国人、絵を描いた中国人、翻訳を行ったポルトガル人、注音と校閲を行った中国人の4人――となる。1、3、4がすべて別人によって行われたとすれば1人増えて5人になる。そして、同じ種類の作業が複数人の分業によって行われた可能性もあるので、編纂者の最大数は定めることができないことになる。

5　浄書時に生じた誤り

『暎咭唎国訳語』の編纂、すなわち、翻訳と校訂が終わったあとに浄書が行われた。故宮博物院蔵の写本はその浄書の結果をさらに書写したものである可能性があるが、現存する唯一の写本であるので、最初の浄書以後における書写の有無やその反復の回数は確かめようがない。ここでは、浄書後の書写を含めて浄書と呼ぶ。[30]

編纂後に浄書が行われたことは常識的に考えても、また、語彙集における整然とした文字の配置からも明らかであるが、先に触れた（2.2）次の項目がそのことを記述の内容面から端的に示している。

路 by land 密 懶（地理門 21）

この見出し語「路」は『西番訳語』では「陸路」である。そして、『暎咭唎国訳語』においても、翻訳の作業の段階では「陸路」と書かれていたはずである。by land と訳され、その通りに「密 懶」と注音されているからである。見出しが「陸路」から「路」に変わった

[30] 春・李・郭（2018a, 2018b）は、『華夷訳語』丁種本は初稿本、皇帝御覧本、軍機処録副本（軍機処の写し）などの段階を経ていると推定し、故宮博物院蔵の写本は表紙や装丁の様子から考えて軍機処録副本であるとする。軍機処は、国家機密事項を職掌し上奏文の処理や勅令の起草を行った官署である（中国歴史大辞典編纂委員会編（1992））。

のが「陸」の脱字であったのか意図的な省略であったのかは分からないが、いずれにせよ翻訳終了後、おそらく浄書時のことであったことになる。[31]「陸」が消えたことで、結果的に「路」を by land とする誤訳になった。

注音に見られる誤りにも浄書時に生じたと見られるものが少なくない。まず、字形の類似に起因する誤字の例がある。例えば、語彙集冒頭の「天文門」の現存する最初の項目は次のように書かれている。

電 lightning 来依寧（天文門 3）

ここでは訳語と注音の対応が不透明である。これは、注音時には「来度寧」と書かれたものが、浄書時にその「度」が字形の似た「依」にすり替わったということではないかと推定される。両字は楷書体で書けば混同を起こすことはないであろうが、崩し方によっては類似性が高まる。

その他の項目の注音における誤字、ないし、その可能性のあるものを今後の研究の参考までに気付いた範囲で示せば以下の通りである。推定による本来の注音字を［ ］内に記す。

水星 Mars 馬児得[→斯]（天文門 5）[32]
風起 little wind 実辰[→脈]盧 穏（天文門 6）[33]
天旱 dry season 得夾[→来] 西仁（天文門 7）
石 stone 実塾[→塾]（地理門 14）
流 tide 歹呀[→度]（地理門 21）
皇図 *majestade* 麻野遠[→達]（地理門 24）
夜短 night short 乃的 衂[→血刀]（時令門 33）[34]
怜悧 a clear young man 記略 谷[→央] 漫（人物門 52）
筋 veins 免舌[→因]（身体門 58）
寺院 church 朱耳[→直]（宮室門 67）
衙門 *audiência* 拗谷[→底]嗹謝（宮室門 68）

---

31 浄書前の段階で校閲者が「陸」を省いたという可能性もあり得るが、その任務から考えて校閲者が見出し語に介入することは考えにくい。校閲の後に行われたであろう項目の並べ替え（注 6）の際に脱字か変更が生じたと考えるほうが自然である。
32 Mars は火星。惑星名の翻訳に混乱が生じている。
33 訳語は little wind であるが注音は small wind であろう。「風起」は“風が起きる、風が吹き始める”ということであるから、いずれにせよ誤訳である。
34 この訂正は「血」の北方方言での読みを前提としている。注音における方言の混合の可能性については後述する。

館駅 *descanso de cavalo* 利吐[→吐]綱煞 別列是（宮室門 68）[35]
醤 *missor* 未梳[→梭]（飲食門 88）[36]
硯 an ink stand 鷹咭 意吐[→吐]胆（文史門 114）
番字 strange letters 意吐[→吐]点 列達（文史門 115）
根 a root 羅阿[→的]（花木門 123）
麦 wheat 委咭[→吐]（花木門 124）
陳皮 orange peel 亜囉耶 些[→比]（香薬門 152）
四 four 阿[→科]（数目門 158）
謹 strict 的瀝技[→度]（通用門 196）[37]
河州 *rio e terra* 抑[→柳] 厄 爹辣（通用門 204）

注音の段階で誤記が生じた可能性もなくはないにせよ、注音者がこれほど多くの誤りを犯すとは考えがたい。少なくとも大半が、英語の発音との対応を考えることなく書写した浄書者による誤りであろう。

脱字については、浄書時の脱漏であるのか最初から当該の音を注音しなかったのかに関する判定がむずかしいことも多い。確実に脱漏と見られるものを数例示すにとどめる。脱字の箇所を「φ」で示す。

江 river 柳φ（地理門 15）
象牙 elephant's tooth 亜厘番的 φ（珍宝門 145）
豆蔻 nutmeg 哪吐φ（香薬門 150）
多 a great deal 咭列 φ衣（数目門 160）

衍字の例には次のようなものがある。加点を施した字は無用である。

雪 snow 実那是（天文門 3）
眼 eye 噯兒（身体門 54）
各 *cada* 咖達写（人事門 174）

35「別列是」は place か。
36 字形の類似で言えば、「梭」より「梳」のほうが近い。両字の広東語での読みはともに so1 である。ただし、「梭」は『唉咭唎国訳語』のほかの数項目で注音に使われているのに対し、「梳」は 1 度も使われていない。
37 注音が strict の s に相当する部分を欠いている。当初、「斯的瀝度」、あるいは、その前に i を加えて「意斯的瀝度」のような形で注音されたのではないかと想像される。

薄 thin 庁技（通用門 196）

このうち、「各」の項目の注音における「写」の衍字は、浄書前の段階では注音が一律に左から右に向かって書かれていた可能性を示唆している。当の項目の様子をその右にある「常 *sempre* 写未里点」の項目と合わせて図 9 に示す。

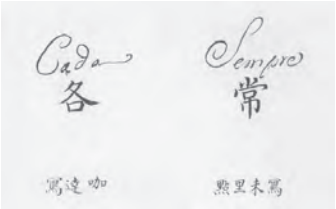

図 9 「各」「常」の項目

「常」の項目の「写未里点」という注音は *sempre tempo* を表す――すなわち、訳語 *sempre*（常に）に *tempo*（時間）が加えられた――のではないかと見られるが、それはともあれ、2 語の注音が当初次のように左から右に向かって書かれ、そして、*cada* は正しく「咖達」と注音されていたとすればどうであろうか。

Cada　*Sempre*
咖達　写未里点

もし 2 つの注音が近接して書かれていたとすれば、「各」の項目の注音が「咖達写」の 3 字だと誤認された可能性がある。そして、その字順を逆転させれば結果は図 9 に見る「写達咖」になる。[38] ほかにも、

鬼 devil 聶列眉（経部門 107）

における注音は正しくは「聶眉列」であろう。これも浄書時の字順逆転に際して生じた誤りである可能性がある。

浄書時における字順の混乱を示唆する項目は限られているが、当初注音が逆の字順で書かれたとする推定は乙種本『西番訳語』の記述様式を考えれば無理な考えではない。すなわち、

---

38 本文に挙げた「眼 eye 嚶児」（身体門 54）と「薄 thin 庁技」（通用門 196）についても、前後の項目の注音に「児」「技」の各字が含まれる。しかし、「各」の項目のように単純には説明できない。すべての事例に通用する統一的な説明を与えることはむずかしい。

『西番訳語』では見出し語、チベット語の訳語、その注音がすべて横書きで、しかも、チベット文字に合わせて見出し語と注音も左から右に向かって書かれている。『華夷訳語』丁種本第1類の編集方針を決めた人物はおそらく漢字をその方向に書くことを好まず、見出し語は縦書きに変え、注音は右から左への横書きに変えた――ただし、それによりチベット文字やローマ字の書記方向に合わなくなった――、そして、『暎咭唎国訳語』もその方針に従ったのではないかと筆者は想像する。

英字で書かれた訳語も当然浄書されたはずである。そして、訳語の綴りにしばしば見られる誤脱の中には浄書の過程で生じたものも多いと考えられる。

堪可 Go Do it Right 悪多衣爹列厄（人事門 180）
対読 I Read over 列得 阿未（人事門 184）

ここでは英字の大小を語彙集における表記の通りに書いている。第1の例の Go はおそらく To がそのように誤写されたものであろう。ただし、To と見ても Go と見ても英字による訳語と注音の対応がはっきりしないので、注音にも誤りがあると見られる。第2の例でも、read over という翻訳の当否は別として、I はおそらく筆記体の大文字の T と I の混同によって To が誤写されたものであろう。注音は To ないし I に相当する要素を欠いている。

6　注音者の人物像

『暎咭唎国訳語』は従来複数の研究で広東十三行の英語通訳によって編まれたと言われてきた通り、その注音は中国語の南方方言の色彩が濃厚である。[39]

まず、多くの北方方言では区別される s と sh、b と m、d と n と l などの同一視ないし混同が見られる。例えば、英語の d を含む語句は多様な漢字を用いて注音されている。漢字を普通話の声母に基づいて分類して例を示す。

d:　罪 a murderer 馬達辣（通用門 193）、飲食 drink *comer* 低領咭 個迷（飲食門 89）
n:　門 door 哪（宮室門 64）、了 done 哈 能（人事門 172）、露 dew 鈕物（天文門 4）

[39] Di（2005）はわずかな議論に基づいて注音が西南官話に基づいていると結論付けている。しかし、その議論が不透明であるのみならず、挙げられた唯一の例が『暎咭唎国訳語』の事実に合致しない。同書でポルトガル語の *cor* は「哥児」と注音されているが――「粉紅 *cor de carne* 哥児 乾尼」（声色門 102）――、狄は注音の現代北京方言での読みが /tɕɪʌ.ə˞/ だと書いている。当の項目の右隣にある項目の注音が「加」で始まるので、狄が同書を書写した際に「哥」を「加」と書き誤ったのではないかと想像される。

l: 女 daughter 喇達（人物門 40）、盆 soup dish 里是（器用門 70）、日落 sun going down 傘 餓忍 朗（天文門 8）

同様に、英語の f は次のように北方方言では f、h、k を声母とする漢字によって注音されている。

f: 麺 flour 仏羅（飲食門 86）
h: 花瓶 flower pot 忽羅喇 抜（器用門 82）
k: 花 a flower 科魯（花木門 121）

「仏」「忽」「科」の現代広東語での発音はそれぞれ fat6、fat1、fo1、すなわち、声母はすべて f である。

また、南方方言に広く見られる入声や音節末の m を使った注音も見られる。現代広東語での音節末子音によって分類して例を示す。

-p: 葉 a leaf 立（花木門 123）
-t: 喫 eat 謁（飲食門 85）、紅 red 列（声色門 100）、脚 foot 仏（身体門 57）[40]
-k: 皁 black 罵叻（声色門 101）、卷 a book 目（経部門 108）
-m: 来 to come 甘 朗（人事門 166）、許 promise 巴攬士（通用門 194）

ただし、中には「臘」の字――広東語での発音は laap6――が「鎖 lock 臘」（器用門 71）の注音に使われ、「結」の字――広東語 git3――が「盔 iron cap 亜煙 結」（器用門 74）の注音に使われるなど、入声の種類の本来的な区別が不明瞭になっている面もある。

「鏄」は広東語と英語の対訳の形で書かれた 19 世紀の英語の語彙集や学習書でもよく使われている字である。[41]

螺 *caramujos* 葭鏄懞日（器用門 78）[42]

---

[40] 韓（2008）は、foot が「仏」と注音され、boot が「秣」と注音されているのを語末子音の消失の例として挙げている。しかし、いずれの字も広東語の発音には入声 t があり、そのような見方は当たらない。韓の注音の分析にはほかにも問題が多く、例えば head が「歇」と注音されていることに基づいて英語の [h] が [ɕ] と読まれているという趣旨のことを述べているが、「歇」の広東語での発音は hit3 である。
[41] ただし、19 世紀の語彙集、学習書で英語の注音によく使われている「孖」「乜」「厘」などの字――それぞれ [ma]、[me]、[l(i)] や [ri] などの発音を表す――は『暎咭唎国訳語』では使われていない。
[42]「螺」の項目は多数の楽器名の項目とともに現れるので、“法螺貝”の類を指すと見られる。

蔵経 prayers 罷鏄也児（経部門 109）

注音に使われた南方方言が具体的にどの地方のものであったかは筆者には判断が付かないが、1 つ言えるのは、それは日母や影母を摩擦音として発音する方言であったことである。[z] や [dʒ] の子音を含む訳語の注音に日母字や影母字が使われているからである。影母字の例をいくつか示せば次の通りである。

日出 sun rising 傘 来寅（天文門 8）
橋 bridge 嘧烈逸（地理門 17）
仏教 joss religion 呀斯 列利養（地理門 25）
職事 to be diligent 多 味 爹利引（通用門 177）

曹主編（2008）の音声言語地図によれば、日母の摩擦音による発音は福建省から広東省にかけての海岸部に広く分布している。影母を摩擦音として発音する地域は相対的に少ないが、広東省に散在している。

しかしながら、以上のような事実から、『暎咭唎国訳語』の注音が南方方言によっていると単純に結論付けることができるわけではない。注音には南方的とは言えない要素もあるからである。

最も目立つのは、音節末の l、r に関わる発音を日母字の「児」「耳」「而」によって注音した事例が非常に多いことである。それらの広東語での発音は [ji] であり、l や r の注音には適さない。l と r の例を 3 件ずつ示す。

雹 hail 奚児（天文門 4）
岡 hill 唏而（地理門 23）
絲 raw silk 喇 西児葭（衣服門 94）
武官 mandarin *do* army 漫達領 達 吖耳馬（人物門 45）
兵器 armor 亜児麻（器用門 81）
北 north 那耳的（方隅門 118）

『暎咭唎国訳語』は日母字を摩擦音の注音に使い、その一方で、音節末の l、r の注音にも使っていることになる。19 世紀の中国で流通し、現在『紅毛番話』と総称されるピジン英語の語彙集はおおむね音節末の l は来母字で表し、音節末の r は省いている（拙論（2019））。『暎咭唎国訳語』においては、「児」「耳」「而」が音節末の l または r の注音に計 80 回近くも使

われている。

また、筆者の把握の限りでは1例だけであるが、反切の方法による注音に見える項目もある。

深 deep 都咝（地理門 18）

広東語や閩南語には、「都」の読みが dou、「立」の読みが lip や lib である方言がある。

以上のように、『嘆咭唎国訳語』における注音は、純然たる広東語の感覚に基づくと見られる『紅毛番話』のそれとは一線を画している。韓（2008）、黄（2010）、聶（2019）は注音者が広東十三行の通訳だったとするが、そのように単純に言い切ることはできない。注音者の職業は分からないが、北方方言の発音や外国語の注音に関する知識を多少とも有する南方の人物であったと考えられる。

ただし、『嘆咭唎国訳語』の注音の方言的基礎の特定にはおのずと限界があることも注意を要する。第1に、注音が複数の人物によって行われた、すなわち、『嘆咭唎国訳語』の注音が複数の方言に基づく注音の混合物である可能性がある。私見によれば、翻訳と注音が一通り終わった後に校閲者が一部の項目の注音を書き換えたわけであるが、注音者と校閲者が同一人であったか別人であったかは不明である（4.2.4）。また、当初の注音がすべて1人によって行われたという保証があるわけでもない。実際、次のように影母字を母音ないし接近音 [j] で始まる音節の注音に使った例もある。

年 year 呀喇（時令門 28）
皇帝 emperor 寅碑盧（人物門 44）
入 to go in 甘 引（人事門 168）[43]

先に見た事例では、これらの字が [z] や [dʒ] で始まる音節を表すのに使われていた。この注音字の二義性は複数の注音者がいた可能性を示唆する。[44]

第2に、注音が英語のどのような発音に基づいているか分からないという問題もある。

牌 target 達児熱（器用門 73）
鎗 launch 朗煞（器用門 73）

---

[43]「甘 引」は come in を注音したものと見られる（4.2.5（E））。
[44] 影母字については、「園 garden 嚕零」（地理門 16）のように [g] で始まる音節の注音に使った例もあり、状況が複雑である。

「牌」の項目の記述を単純に受け止めれば、「熱」の字によって閉鎖音 [g] で始まる音節を表していることになる。しかし、これは英語を正確に発音できないポルトガル人がポルトガル語の正書法に従って target の g を [dʒ] と発音したのを注音したものである可能性がある。「鎗」の項目では、一見破擦音 [tʃ] を「煞」――普通話での発音は shā、現代広東語での発音は saat3――の字で注音しているかのようである。しかし、これもポルトガル人が ch の綴りを [ʃ] と読んだということかも知れない。

もっぱら英語の標準的な発音を前提として中国語の方言音声との関係を探るという方法は通用しないということであり、その意味においても問題は複雑である。

7　語彙集の基本的性格

『暎咭唎国訳語』にピジン英語の表現が含まれることから、黄（2010）と聶（2019）はそれがピジン英語の語彙集であると結論付ける。

> 它才真正称得上是中国现存最早的中英对照且以汉字标音的“Pidgin 英语”词语集。（『暎咭唎国訳語』こそ現存する最古の中英対訳かつ漢字による注音を有する“ピジン英語”の語彙集と呼び得るものである。）（黄（2010））
>
> 《暎咭唎国译语》为明清时期“华夷译语”的一种，是汉语和早期广东地区“中国皮钦语”的对照辞书。（『暎咭唎国訳語』は明清期の『華夷訳語』の一種で、中国語と広東地方における早期“中国ピジン語”の対訳辞書である。）（聶（2019））

しかし、『暎咭唎国訳語』のそのような評価は、語彙集のきわめて限定的な範囲の事実を語彙集全体に当てはまるものとして誤認したものである。

注音にはピジン英語や簡略化された英語表現が現れるが、そのような場合でも英字で書かれた訳語はその大半が正統な英語である。4.2.5（C）に挙げた、注音がピジン英語になっている「人事門」の項目の例で言えば――「人事門」の項目の訳語には文や句の形をした複合的な表現が多いことから、単独の名詞や動詞の翻訳と異なり、規範的な英語からの逸脱が起きやすい――、I know it、It is very exact、I have never seen him、He is not come yet、a crowd of people などの文や句があった。「人事門」以外の門から数例示せば次の通りである。

> 継父 father in law 法達 因 喇（人物門 51）
> 被 quilt for a bed 客 眉哆（衣服門 92）
> 医書 doctor’s book 楽哆 目（文史門 116）

不聴 I can't hear 堅 熙牙（通用門 197）

不許 You must not do it 有 母斯 哪 多（通用門 202）

英字で書かれた訳語はいずれも完璧な英語であり、そこにはピジン英語の要素の片鱗もない。読みにくい筆跡で書かれ、綴りが誤っているとしても――本稿では綴りの誤りは訂正して引用している（2.3）――、そのことは訳語がピジン英語であることを意味しない。『暎咭唎国訳語』にはポルトガル人の英語知識の不足に起因する不正確な訳語もあるが、それもまたピジン英語ではない。[45]

しかも、注音には校閲者に由来するピジン英語が混入していると言ってもそれはごくわずかであり、ピジン英語と判断できる事例は 734 件の語彙項目を通じて 10 件を大きく上回らない。それとは対照的に、訳語へのポルトガル語の混入例はきわめて多く、筆者の粗い見積もりによれば 160 件余りにのぼる。

したがって、『暎咭唎国訳語』はピジン英語ではなく正統な英語の語彙集であり、そこに大量のポルトガル語とわずかなピジン英語が混入していると考えるのが適切な理解である。

聶・王（2011）は、『暎咭唎国訳語』に各種の誤りが頻出することについて、当時の広東英語がポルトガル語の要素を多く含み、広東英語話者の英語や中国語もまた純正のものでなかったからだと述べている。しかし、上述の通り、『暎咭唎国訳語』への広東英語、すなわち、ピジン英語の混入はきわめて限定的で、それを語彙集の基本的な特徴と見ることはできない。私見によれば、『暎咭唎国訳語』における錯雑の核心的な原因は、この語彙集が中国人と、中国語をよく知らず英語の知識も限られたポルトガル人とのあいだの不自由な意思疎通に基づいて編まれたことにある。誤りや混乱の圧倒的大多数は広東英語の反映ではない。

8　西洋館訳語との関係

故宮博物院蔵『華夷訳語』丁種本の第 1 類には、5 種類の西洋館訳語、すなわち、ラテン語、ドイツ語、ポルトガル語、フランス語、イタリア語の語彙集が含まれる（2.1）。

『暎咭唎国訳語』の編纂にポルトガル人が関わったとすれば、西洋館訳語との関係において 2 つの可能性を考え得ることになる。1 つは、そのポルトガル人はポルトガル語の語彙集の編纂に当たったポルトガル人であったという可能性であり、もう 1 つは、『暎咭唎国訳語』

---

45 例外的に、ポルトガル人の書いた訳語があからさまなピジン英語だと見られる項目が 1 つある。注音も訳語に一致している。

不尽 No can clear 哪 敢 極列亜（人事門 190）

これをどう解釈してよいかは今のところ不明である。

に訳語を提供したポルトガル人は翻訳に際して西洋館訳語――中でも、ポルトガル語ないし欧州の共通書面語であるラテン語の語彙集――の訳語を参考にしたという可能性である。

第1の可能性については比較的容易に判断を下すことができる。まず、英語を含む欧州6言語の語彙集の訳語はいずれも翻訳を担当した西洋人によって書かれたと考えられるが、『唎咭唎国訳語』の訳語の筆跡とポルトガル語語彙集の訳語の筆跡は明確に異なる。同一のポルトガル人の書いた訳語が相異なる浄書者によって書写されたという解釈も理屈のうえではあり得るが、次に述べる事情も考え合わせれば、両語彙集の編纂には相異なるポルトガル人が関与したものと推定される。

第2の可能性を考えるには、まず欧州6言語の語彙集がどのような順序で編纂されたかを確かめる必要がある。春・李・郭（2018a, 2018b）は、まず『唎咭唎国訳語』が作られ、その後語彙項目を増補して西洋館訳語の語彙集が作られたと述べている。しかし、実際のところはその逆で、『唎咭唎国訳語』は西洋館訳語の後に編まれたか、さもなくば、両方が同時に編まれたものと考えられる。なぜならば、『唎咭唎国訳語』で乙種本『西番訳語』の見出し語をそのまま使いつつ、各門内の項目を1字語、2字語の順に配置し直しているのは丁種本第1類の語彙集の様式に合わせた結果だと考えられる（2.2）からである。『唎咭唎国訳語』が先に編まれ、質の高い第1類の語彙集――注音法が緻密で統一が図られ（2.1）、『唎咭唎国訳語』のような混乱はほとんどない――が項目配置の様式に関して『唎咭唎国訳語』に模範を求めたとは考えにくい。

したがって、『唎咭唎国訳語』の編纂に協力したポルトガル人は翻訳に際して西洋館訳語を参照することができた可能性があることになる。第1類の語彙集の見出し語は、『西番訳語』の見出し語に増補を中心とする調整を施したものであり（拙論（2020））、『唎咭唎国訳語』の見出し語の大半は第1類の語彙集にもある。

そのような考えから『唎咭唎国訳語』の訳語を西洋館訳語――特に、ポルトガル語語彙集『播呼都噶礼雅話』とラテン語語彙集『拉氐諾話』――のそれと比較してみたが、『唎咭唎国訳語』の編纂に西洋館訳語が利用された形跡を見出すことはできなかった。確認できた共通性は『唎咭唎国訳語』と『播呼都噶礼雅話』とで単純なポルトガル語の訳語に一致が見られるという程度にとどまる。また、例えば見出し語「羅漢」――「小乗仏教の修業の極意に達した者。小乗のさとりを得た聖者。」（中村（1975））――について言えば、西洋館訳語はそれを説明的に“仏の仲間”と訳しているが、『唎咭唎国訳語』は音訳ですませている。[46]

羅漢 *companheiros do Fo* 𩜁班鬚噜斯 都 仏（『播呼都噶礼雅話』経部門 305）

46「音訳」と表現したが、通常の音訳、すなわち、異言語の語句の発音の中国語化とは異なり、「羅漢」を発音の近い「魯罕」に書き換えているに過ぎない。

羅漢 *socii fo* 莎済伊 仏（『拉氐諾話』経部門 305）
羅漢 Lo hang 魯罕（『嘆咭唎国訳語』経部門 111）

「燃灯仏」とも呼ばれる「燃灯」――「過去世に出現して、釈尊に未来には成仏すると予言した仏。」（中村（1975））――については、西洋館訳語は“仏の一種”、“仏の名前”などと訳しているが、『嘆咭唎国訳語』は誤って動詞句として訳している。

燃灯 light a candle 来得 堅列（経部門 109）

したがって、『嘆咭唎国訳語』の編纂に西洋館訳語は利用されておらず、見出し語の訳語はもっぱら中国人とポルトガル人のやり取りに基づいて準備されたと判断することができる。

9　補説 3 題

最後に、『嘆咭唎国訳語』に関わる 3 つの周辺的な問題について述べる。

9.1　音訳地名「英吉利」の成立

聶（2019）は、『嘆咭唎国訳語』の書名に含まれる「嘆咭唎」という国名の語源がポルトガル語にあるとし、その証拠として、J. F. Marques Pereira *Ta-Ssi-Yang-Kuo, Archivos e Annaes do Extremo-Oriente Portuguez*（『大西洋国』）[47], Serie I, Volume I, Numero I（1899 年）所載の世界国名に関する記事に「英吉利」がポルトガル語の *Inglez* ないし *Inglaterra* に由来すると書かれていると述べている。しかし、「英吉利」が元来ポルトガル語の *Inglês* ――過去のポルトガル語辞典では *Inglêz* などとも綴られている――の音訳であった可能性は実際十分にあるにせよ、19 世紀末にポルトガル人が根拠を示すことなく述べた見解に証拠能力はない。『嘆咭唎国訳語』の編まれた 18 世紀中葉から見れば、それは 1 世紀半も後のことである。単にポルトガル人だからポルトガル語の知識に頼ってそう考えたに過ぎないという可能性がある。「英吉利」の語源を英語の English と見るとしても、少なくとも音訳の観点からは何の問題もない。

「英吉利」という音訳地名の歴史の問題は 2 つの段階を区別して考える必要がある。すなわち、英国が「英吉利」という音訳の表すような発音で呼ばれるようになった――そして、それを表すのに適した漢字で書かれるようになった――第 1 の段階と、音訳に「英吉利」な

---

[47] Ta-Ssi-Yang-Kuo、「大西洋国」はポルトガルを指す。

いしその各字に口偏を加えた「暎咭唎」という表記が使われるようになった第2の段階とである。

第1の段階の用例として筆者が中国の資料中に確認できた古いものは、17世紀後半の夏琳『海紀輯要』巻二[48]における1675（永暦29）年の記録中に現れる「英圭黎」[49]や、18世紀前半の陳倫炯『海国聞見録』に現れる「英機黎」である。しかし、そうした音訳地名がさらに早くから使われていたことが、日本の資料における記録から知られる。17世紀前半の外交記録である以心崇伝（すうでん）『異国日記』における1612（慶長17）年の記録に「英圭黎」の用例が見られるのである。16世紀以来日本とポルトガルおよびスペインの交流が始まっていたという事情から考えて、『異国日記』の「英圭黎」がポルトガル人を通じて中国から伝えられたものである可能性は十分にある。1600（慶長5）年に日本に漂着したオランダ船の航海士である英国人ウィリアム・アダムズ（William Adams、後の日本名三浦按針）が妻に書き送った手紙[50]にも、徳川家康との対面時にはポルトガル語を話す日本人を介してやり取りが行われたことが書かれている。

第2の段階の初出例として謝（2007）に挙げられているのは、1725（雍正3）年の公的文書における「暎咭唎」の用例である。「英圭黎」の使用開始がかりに17世紀初頭だったとすれば、その1世紀余り後の出現である。それはちょうど、長く広東貿易から排除されていた英国東インド会社が清朝の許可を得て中国との貿易を始めた時期であった（Morse(1926)）。『暎咭唎国訳語』でも「暎咭唎」、それとほぼ時を同じくして編まれた傅（ふ）恒他編『皇清職貢図』（1761（乾隆26）年）――人物画の描かれた朝貢諸民族の概説書――の巻一では「英吉利」という表記が使われている。「英圭黎」や「英機黎」――ほかに「英鶏黎」「膺吃黎」などの表記もあった――から「英吉利」への変更はおそらく、印象の悪い「鶏」などの字を避けて、すべて好ましい字義の文字に揃えたということであろう。とすれば、「英吉利」という表記の考案は、英国人の要求、さもなくば、当時貿易上の関わりを増しつつあった英国に対する中国人の自発的な配慮に基づくものであったと考えられる。

9.2 『暎咭唎国訳語』に現れる日本語由来語

『暎咭唎国訳語』を調べて気付いて驚いたのは、収められた語彙項目734件のうち6件の訳語が日本語に由来するということであった。

---

48 確認は『台南文化』第5巻第4期（台南市文献委員会、1957年）所載の「台湾史料専輯乙編之三 海紀輯要」および台湾銀行経済研究室編『台湾文献叢刊第二二種 海紀輯要』（台湾銀行、1958年）における翻字による。

49 この用例の存在は拙論（2018b）執筆時には把握できていなかった。したがって、同稿末の英語名称年表には記載していない。

50 確認はMurakami and Murakawa (eds.)（1900）所収の翻字版による。

そのうちの1件は次のような「醤」の項目である。

醤 *missor* 未梭（飲食門88）[51]

この訳語の *missor* は「味噌」であろう。英語であるともポルトガル語であるとも決めがたいが、かりにポルトガル語と見なして斜体で表記した。

残りの5件は、5件と言ってもいずれも「坊主」ないしその派生形やそれを要素として含む複合表現である。

僧人 *bonzo* 幔日（人物門46）
和尚 *bonzee* 満日（人物門50）
比丘 *bonza* 満咱（人物門50）
国師 *bonzomor* 般著摩（通用門210）[52]
法界 *orde de bonzo* 阿児得 的 本著（天文門9）[53]

こちらは語尾変化や語形成の様子からすべてポルトガル語の表現であると判断することができる。

Oxford English Dictionary 第2版（1989年）の挙げる英語での初出例は miso が1615年、bonze が1577年のものである。*bonzo* はフランシスコ・ザビエル（Francisco de Xavier、1506? ～ 1552年）が1552年にインドからイエズス会員に書き送ったポルトガル語の書簡によって欧州に伝えられたことが知られている（Schurhammer and Wicki（1945）、河野訳（1985））。「味噌」の語源は明らかでないようであるが、「坊主」は中国語から日本語に借用され、意味的な変容を遂げ、それがポルトガル語に入り、その後欧州の諸言語に広まったのであろう。それが再び18世紀の中国に持ち込まれて『暎咭唎国訳語』に記載されたということであり、多段階かつ全体として非常に長距離の伝播、言語交渉があったことになる。

ちなみに、以上のような項目の存在も、『暎咭唎国訳語』の編纂における西洋人の関与を示している。「味噌」や「坊主」が元来中国語の表現だったとしても、ミソやボウズという日本語の語形が18世紀の中国で知られていたことは考えられないからである。もし訳語が中国語として書かれたのであれば、注音も先に見た「羅漢 Lo hang 魯罕」（経部門111）の

---

51 注音は実際には「未慌」と書かれている（5節）。
52 *bonzomor* の *mor* は英語の major に相当する。
53 *orde* は正しくは *ordem* であるが、『暎咭唎国訳語』で一貫してそう綴られ、注音にも m の要素がないので、例外的に原文の通りに引用した。

項目のように中国語での発音に基づいて行われたはずである。

なお、日本語の「坊主」に由来する要素を含む訳語はすべての西洋館訳語の語彙集にも現れる。語彙集ごとにその範囲は異なるが、「廟」「寺」（宮殿門）、「袈裟」「法衣」（衣服門）、「帰依」（経部門）、「番僧」（通用門）などの項目にそれが見られる。

9.3 「世界」の誤訳

平易な見出し語で訳語も平明な英語でありながら、明白な誤訳で、かつ、誤訳の原因の特定がむずかしいことで興味をそそるのが「世界」の項目である。「世界」がなぜか good time と訳されているのである。

世界 good time 個多 低墨（地理門 23）

図 10 「世界」の項目

ポルトガル人が world という語を知らなかったわけではない。同じく「地理門」にある「天下」の語は次のように world を使って訳されている。

天下 whole world 噸盧 完児（地理門 24）

聶（2019）は、「世界」の good time という訳語について、翻訳を主事した役人が官話で読み上げた「世界」を、広東語を母語とする翻訳者が「時間」と聞き誤った――すなわち、「世界」の発音の後ろに子音 n があるものと受け止めた――ために生じた誤訳だとしている。しかし、中国語で「時間」が現代におけるような意味を表す名詞として広く使われるようになったのはおそらく日本語の影響による 19 世紀末以後の現象であり――中国で 19 世紀に編まれた各種の英語辞典、学習書における time の訳語は「時」「時候」「時節」「光陰」などである――、そのような解釈には無理がある。[54] 加えて、訳語における good という形容の存在理

54 日本語においては「時間」という名詞が 1840 年代までに成立したことが知られている。松井（2008a, 2008b）によれば、それは時の長さ、量を表すために作られたものであった。そして、「間」の字の選択

由を説明していないという問題もある。

この謎めいた誤訳に関する筆者の憶測をあえて記せば、good time という訳語はポルトガル人が *bom tempo* という訳語を思い浮かべてそれを英語に直訳したものであった。ポルトガル語の *tempo* は、他のロマンス諸語の同源語と同じく、time に加えて weather の意も表す。中国人が描いて見せた“世界”の絵で天に太陽が輝いていたことから“よい天気”という翻訳になったということである。

『嘆咭唎国訳語』において time と *tempo* の“相通”はほかの項目にも見られる。

時常 several times 賒微里 点（時令門 35）

ここでは、「時常」、“しばしば”が several times と訳され、その times は「点」、すなわち、*tempo* と注音されている。ポルトガル人はおそらく times と書きつつ *tempo* と読み上げたのであろう。

10　おわりに

外国語語彙集として特異な性質を有する『嘆咭唎国訳語』の編纂者と編纂過程を推定し、関連するいくつかの問題について述べた。従来の研究はいずれも同書の目を引く要素――英字の筆跡上の特徴や誤り、ポルトガル語やピジン英語の混入、訳語と注音の不一致、注音の南方方言的特徴など――の断片的な観察に頼って結論を下していた。資料の正しい理解のためには、その全体の観察に基づく総合的な考察、判断が必要である。

ポルトガル語に関わるものを中心として、訳語や注音を解読できなかった項目も多い。また、適切な解釈を与えることのできなかった問題もいくつかある。中国語を満足に話せず、英語の知識も不十分なポルトガル人が中国人から説明を受けつつ翻訳を行った結果としてしばしば誤訳が生じたと考えたが、その割には意味の説明のむずかしそうな見出し語が正しく訳されている事例もあるのはなぜか――ポルトガル語に訳されたものもあるにせよ――という疑問も残っている。今後、資料のさらに正確な読解と分析に基づいてここで述べた推定の不足と誤りが補訂され、この語彙集、ひいては、アジアにおける英語学習の初期相に関する理解が深まることを期待したい。

には、（現代語の分かりやすい例に置き換えて言えば）「１年の間（あいだ）」や「睡眠の間（あいだ）」のような表現の存在が関わったのだろうと言う。他方、中国語で「時間」の名詞としての用法――主語や目的語などとしての使用――が一般化したのは 20 世紀である。

文献

石田幹之助（1931）「女真語研究の新資料」桑原博士還暦記念祝賀会編『桑原博士還暦記念 東洋史論叢』（弘文堂書房）

大友信一・木村晟（あきら）編（1968）『日本館訳語―本文と索引―』（洛文社）

河野純徳（こう の よしのり）訳（1985）『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』（平凡社）

田野村忠温（2017）「日本最初期英語研究書の依拠資料と編集」『待兼山論叢』第 51 号文化動態論篇（大阪大学大学院文学研究科）

田野村忠温（2018a）「新出資料『華英通語』道光本と中国初期英語学習書の系譜―附論 福沢諭吉編訳『増訂華英通語』―」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第 58 巻

田野村忠温（2018b）「言語名『英語』の確立」『東アジア文化交渉研究』第 11 号（関西大学大学院東アジア文化研究科）

田野村忠温（2019）「中国初期英語学習書における英語発音の漢字表記―流音の知覚と表記―」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第 59 巻

田野村忠温（2020）「北京故宮博物院蔵『華夷訳語』丁種本第 1 類の分析―西洋館訳語の編纂とドイツ語の名称の問題を中心に―」『待兼山論叢』第 54 号文化動態論篇（大阪大学大学院文学研究科）

中村元（1975）『仏教語大辞典』下巻（東京書籍）

西田竜雄（1970）『西番館訳語の研究―チベット言語学序説―』（松香堂）

西田竜雄・孫宏開（1990）『白馬訳語の研究―白馬語の構造と系統―』（松香堂）

松井利彦（2008a）「近代日本語における《時》の獲得―新漢語『時間』と『期間』の成立をめぐって―」沈国威編著『漢字文化圏諸言語の近代語彙の形成―創出と共有―』（関西大学出版部）

松井利彦（2008b）「幕末における時長表現語―『時刻』、そして『時限』から『時間』へ―」『近代語研究』第 14 集

曹志耘主编（2008）『汉语方言地图集』语音卷（商务印书馆）

春花・李英・郭金芳（2018a）「清乾隆年编《华夷译语》述论」『故宫学刊』2018 年第 1 期（紫禁城出版社）

春花・李英・郭金芳（2018b）「論清乾隆年編『華夷譯語』」故宮博物院編『故宮博物院藏乾隆年編華夷譯語』第 1 巻（故宮出版社）

故宫博物院編（2018）『故宫博物院藏乾隆年編華夷譯語』全 18 巻（故宫出版社）

韩丽娜（2008）『《英吉利国译语》研究』（吉林大学硕士论文）

黄兴涛（2010）「《暎咭唎国译语》的编撰与“西洋馆”问题」『江海学刊』2010 年第 1 期（江苏省社会科学院）

聂大昕（2019）「《暎咭唎国译语》编纂流程考」『北方民族大学学报（哲学社会科学版）』2019 年第 1 期

聶大昕・王洪君（2011）「《暎咭唎國譯語》、《播呼都噶禮雅話》簡介―從兩部尚未交佈的官方雙語辭書看清代早期廣東的語言和社會」李向玉主編『澳門語言文化研究（2009）』（澳門理工學院）

聂鸿音・孙伯君编著（2010）『《西番译语》校录及汇编』（社会科学文献出版社）

司佳（2016）『近代中英语言接触与文化交涉』（上海三联书店）

香港語言學學會粵語拼音字表編寫小組（2002）『粵音拼音字表（第二版）』（香港語言學學會）

谢贵安（2007）「从英法德意俄美汉译国名演变看中国人对西方列强的认知过程」冯天瑜・刘建辉・聂长顺主编『语义的文化变迁』（武汉大学出版社）

张振江（2007）「早期中英接触沟通语言的变迁—从葡萄牙语基础语言到英语基础语言」『语言研究』第27卷第1期（华中科技大学中国语言研究所）

中国历史大辞典・清史卷（上）编纂委员会编（1992）『中国历史大辞典・清史卷（上）』（上海辞书出版社）

周振鹤（1998）「《红毛番话》索解」『广东社会科学』1998年第4期（广东省社会科学院）

Di, Xuan (2005) 'An 18th century English-Chinese dictionary'. Unpublished ms.［言語学の未刊行論文を掲載するノルウェーのトロムソ大学（Universitetet i Tromsø）の Web サイト LingBuzz（https://ling.auf.net/buzzdocs/）で公開されているのを 2020 年 1 月に取得した。］

Fuchs, Walter (1931) 'Remarks on a new "Hua-I-I-Yü"'. *Bulletin of the Catholic University of Peking,* No. 8.（『輔仁英文學誌』第 8 期）

Hill, A. P. (1920) *Broken China: A Vocabulary of Pidgin English.* Shanghai: A. P. Hill, & C. B. Weiss.

Kramer, Johannes (2016) *Etymologische Studien zum Papiamento.* Hamburg: Helmut Buske Verlag.

Morse, Hosea Ballou(1926) *The Chronicles of the East India Company Trading to China 1635-1834, Vol. I.* Oxford: The Clarendon Press.

Murakami, Naojiro and Kengo Murakawa (eds.)(1900) *Letters Written by the English Residents in Japan 1611-1623: With Other Documents on the English Trading Settlement in Japan in the Seventeenth Century.* Tokyo: Sankōsha.

Nie, Daxin and Wang Hongjun (2015) 'An introduction to *An English-Chinese Dictionary* and *A Portuguese-Chinese Dictionary*—Views on the language and society in Canton area from two unpublished official collative dictionaries compiled in the 18th century'. *Journal of Literature and Art Studies,* Vol. 5, No. 11. Wilmington, Delaware: David Publishing Company.

Schurhammer, Georgius and Iosephus Wicki (eds.)(1945) *Epistolae S. Francisci Xaverii, Aliaque Eius Scripta, Tomus II (1549-1552).* Rome: Apud "Monumenta Historica Soc. Iesu".

Shi, Dingxu (1991) 'Chinese pidgin English: Its origin and linguistic features'. *Journal of Chinese Linguistics,* Vol. 19, No. 1. Berkeley, California: Project on Linguistic Analysis, University of California, Berkeley.

Van Wely, F. P. H. Prick (1912) "Das Alter des Pidgin-English". *Englische Studien,* 44. band. Leipzig: O. R. Reisland.

Williams, Samuel Wells (1836) 'Jargon spoken at Canton: how it originated and has grown into use;

mode in which the Chinese learn English; examples of the language in common use between foreigners and Chinese'. *The Chinese Repository*, Vol. 4, No. 9.

Williams, Samuel Wells (1837) 'Gaoumun fan yu tsā tsze tseuen taou (澳門番語雜字全套), or A complete collection of the miscellaneous words used in the foreign language of Macao. 2. Hungmaou mae mae tung yung kwei hwa (紅毛買売通用鬼話), or those words of the devilish language of the red-bristled people commonly used in buying and selling'. *The Chinese Repository*, Vol. 6, No. 6.［記事標題に含まれる表記上の問題については拙論（2018a）の文献における注記を参照。］

On the Compilation of *Yingjiliguo Yiyu,* the Oldest Chinese-English Dictionary

Tadaharu TANOMURA

Yingjiliguo Yiyu is the very first Chinese-English glossary, officially compiled in China in the middle of the eighteenth century. It comprises of 734 lexical entries, which are divided into twenty semantic categories, such as 'Astronomy', 'Geography' and 'Time'. Each entry consists of three elements, viz., a Chinese headword written in Chinese characters, its English translation in Roman characters and the phonetic transcription of the translation in Chinese characters.

Yingjiliguo Yiyu, unlike its contemporary official glossaries of other European languages (Latin, German, Portuguese, French and Italian), possesses the following three peculiar distinguishing properties.

1) The handwritten translation is often hard to read, and is prone to mistakes.
2) The headword is often translated into Portuguese, instead of into English.
3) The translation and its phonetic transcription often fail to match.

In an attempt to explain such an atypical nature of the glossary, several theories concerning its compiler and/or compilation process have been put forward in China. However, they all rely upon observation of a limited range of noticeable phenomena, and fail to explain complicated facts involving the entire glossary. In this article, based upon as comprehensive an analysis of the glossary as possible, the author will present an alternative theory concerning the compilation of *Yingjiliguo Yiyu*, and also argue, among other things, that the English used in the glossary basically is not pidgin English as has been claimed in the past, but the authentic variety of English.

Keywords: Chinese-English dictionary, *Yingjiliguo Yiyu,* 『英吉利国訳語』